July 1900
no. 510

明治三十三年七月十四日

女學雜誌

第五百十號

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

第五百拾號目次

◎社說
國家の要忠
支那の愛國者

◎評論
已が郎さ菊池幽芳…………（朝天行）
（日本文壇の新生面）
三遊亭圓遊論…………（青柳有美）

◎亞米利加だより
替し惡し草…………（征下庵）
愛國諸人○與論宗○日本的基督教○惡魔の手からパン○文明はきらひです○老婆帝崩さ印度人○予は戰亂の賊さならん○信仰うすきものよ○ Dont look nice ○舞踏會○人よりもけもの

◎女學
女子郎里の大意…………（新井奧邃）
佳美人を論じて某君に復す…………（善魔の子）
（附）章氏戀愛之原理及佳美人の所在
純潔緣問題…………（山形東根）

◎家庭
田舍の嫁御

◎隨感
智育に偏すさ言ふもの誤謬○智德不二○文政一新豈至難ならんや○新井奧邃君

◎雜錄
論青絕句十二首並引（嚴本善城）○海舟先生逸話○胸のひゞき二つ三つ四つ（某女）

女學雜誌去六月分は都合により休刊し、今回發行の號をもて七月分とす。但し近比休刊の分にかはるべきものは、追ゝ特に出版したきものと期し居れり、右陳謝す。

●女學雜誌定價表●

前金		
壹冊定價	拾錢	（內國無郵稅）
半年分定價	壹圓四拾錢	
一年分定價	貳圓	

◎代金は總じて前金にて御注文ありたし
◎年來引續購讀の諸君にて前金切れ候共御斷無之間は引續き發送するとも可有之事
◎但し其節は總て一冊十錢の割にて計算し追て請求可致事是れ甚に不本意乍ら計算の煩はしき不得止左樣仕候間かねて御承知置被下度候

廣告料		
一行（廿二字詰）一回	前金拾錢	
同	三回以上	一割引
同	六回以上	二割引

送金　送金は東京巢鴨郵便支局に宛て小爲替にせられたし、郵便切手にて送らるゝ人は總べて一割增にて計算せられたし

明治三十三年七月十日印刷
明治三十三年七月十日發行
發行兼編輯人　嚴本善治
印刷人　布川孫市
東京府北豐島郡巢鴨村字庚申塚二百四十六番地
發行所　女學雜誌社
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場
（電話番町十九番）

◎新刷後の本誌を見よ

月刊雜誌

無絃之響

壹冊定價四錢　前金の事　半年分廿二錢　一年分四十錢　郵分代用二割增　內國無郵稅
（每月一回發行）

第拾壹集目次（六月十日既行）
◎所信
富家權門の女婿、融通的主義の小策士、救陽女學院設立の議
◎言論
紳士淑女の自任あれ（小川桃花）：マホメットの多妻を論ず（青柳有美）　貴族の骨（小川踏火）
◎雜辭
頑夢連（長井金風）　歸鄉雜咏（嚴本善城）：菩薩眼（黑光女史）：孤庵「新體詩」（北村舟畔）：哀れ老婆（衛濁女史）：惡緣に結ばれたる處女（露草庵）　花絵「新體詩」（朝比奈天行）：海士處女「新體詩」（三輪花影）
◎時評
皇少校山室軍平書（青柳猛）：穗積さ瀧澤（妙味庵）：二六記者の猫（青顏）：木村櫻草店の寂滅（細一）：辛辣刺法（泣雨）：次は幼年禁酒會の（馬城）

第拾貳集目次（七月十八日發行）
◎所信
皇帝法主論、婦女政權論
◎言論
發義和團論（青柳有美）：感化論（布川靜淵）：情死論（關星月）：天父信仰論（荒井奧邃）
◎樂說
樂樂聲音（嚴本善治）：音樂感化ゟ（青柳有美）
◎雜辭
婆泣かし（露虫女史）……外四件
◎時評
淸廷の擾亂（嚴本捷治）……外三件
◎時事

發行所　巢鴨村庚申塚　露草會
賣捌所　東京市神田區　上田屋　中庸堂

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

明治三十三年六月二十五日發兌

第五百拾號

社說

國家の憂患

◉『國家の患』と云ふとは、屢ば聞く所ろであるが、眞に其の患と云ふべきものは何事である乎、少こしく明白に考がえねば、ちと分りにくいやうに思はれる。只だ、一概無雜作に答えの出來ぬものであらふと信ずるが、世上に於ては左して其邊の議論もないやうに見受けて居る。

◉成程、其の折、其の折の患と云ふものは、誰の目にも見えて居る。例せば、今回の支那問題の如きにせよ、兎に角、一種の患には相違ないのである。然し、吾輩がこゝに一場の談論を試みたいと思ふものは、斯る一時限の一事實に就いてでなく、凡そ如何なる時節に於ても常に通有の道理となるべき大道に鑑みて、眞に國家の憂患とすべきは何ものである乎と云ふ一問題を講究して見たいのである。

◉左らば、何ものが國家根本の憂患である乎、財政上の困難である歟、風儀道德の墮落である歟、敵國外患の壓迫である歟、國内の騷亂、治安の壞頽である歟。其の何れも皆な一大事に相違なく、一と度び誤まつて救治の道を失する時は、國家は滅亡するに極まつて居る。故に吾輩は之を「患」にあらずとは言はぬが、左りとてまだ之をもつて根本最上の憂患とは見做して居らぬ。

◉何故に最大の憂患とは見做さぬかと言ふに、成程、此等の事情は、一見國の災のやうにも見へるが、もし人傑あつて之を救ふとすれば、必らずしも救ひがたきものではない、其の救ひの活手段から見るときは、此の逆境が反つて國民を刺撃し、改革を斷行するの基ひとなるので、他日顧つて考ふれば、寧ろ國家の慶福となるともあるのである。一家貧乏す

れば、其の家の子は勉強する、一家混亂すれば貞女孝子の顯はるゝこともある、左すれば其家の眼前の災難丈けを見て之を無上最大の患とは言ひがたきものである。國家の事といへども、別段之に違つたことはないのである。

●故に、國家眞實の患なるものは、決して前段に擧げたる如き逆境の場合を言ふのではない、左りとて又、國が小さいとか、民が少ないとか、先天的に不利益な境遇に置れて居るとか云ふやうなことを申すのでもない。左らば、何が所云ゆる大憂患であるかと言ふに、勿論、別條はない、人物なきことが即はち國家の眞憂、國家の大患である

◉隆國、亡國の機は、至極簡短で、たゞ人傑あると無きとによつて岐れるのである。無論、時を得ずして長恨して死ぬる英雄もあるが、其の魂魄の遺風、精靈の感應は決して無益に亡ぶるものでない、必らず其の後繼をつくるものである。夫れ故、國に大なる魂あり、賢こき頭腦あり、熱したる情火ありて、凝つて英雄となり、大人となり、達人となる時に於ては、其國は必らず隆起するのである、如何に其國本來の面積は狹くとも、其國從來の經濟は貧しくとも、忽ちにして而目を改たむるものである。もし此等の人傑あらば、國家の逆境を一轉し、消極を積極に變え、進んで世界の利益を我に收むることは、決して出來がたいことではないのである。

◉たゞもし國に人傑なくんば、其の大なる國も分割せられ、其の長き歷史も汚され、其の富も奪はれ、其の人民も奴僕にせらるゝ丈で、何の力にもならぬのである。左すれば、國家の眞憂大患は決して他事に存するものでない、たゞ人物なき一事に淵源することが明白に分るのである。

●然し、此の人物ほど價高く、入用多くかゝるものはないので、中々容易に出來上るものではない。百斗の涙、万斛の血を流して初めて其の素養を滿たし、千尋の涯、万丈の海を渡して、やうやく其の遺傳を集め、久しふして而して後ちに麒麟兒出生し、此の兒亦た幾多の艱儀苦辛を經て漸やく國家を統率するに足る人傑となるのである。

◉左れば、誰が其の人傑の卵子である乎、皇天の外、何人も承知せざることなる故、たゞ何人にも通じての覺悟と云ふは　刻苦勉強して、人物となるの工夫に力むることである。國家の患とは人物なきことであるが、其の人物なき所以の一層の患ひは即

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

はち人物たらんことに、力むる氣風の欠けたることである。

◉此に至つて人々の覺悟すべきことは、方今日々に起り來る外患内憂を見て一々に驚愕するなどは、愚なる不見識なことで、苟しくも國家の爲に眞に憂ふるものは、左樣の見識ではならぬ。國家に人物さへあらば、斯程の騷ぎのあるは寧しろ幸福で、乃はち採つてもつて活用すべく、轉じて以て幸となすべきである。然し其の人物が無いから憂ふるのであると申すならば、夫が間違つて居る。果して人物が無いならば、ナゼ自分で其の人物になる工夫をせぬ乎。自分が人物にならんと力む勇氣もなく、たゞ國家の爲めに憂ふる〳〵と吹聽して泣言を言ふなどは、眞に卑屈千万の事で、此等の士は、公け事に口を容れべき天品はないものである、靜かに一個の私事に勉強して慷慨論などはすまじき筈のものである。

◉むかしから悪るい習慣があつて、何か國家の爲に慷慨したり、泣いたりするものがあると、其の泣言と、涙の痕とによつて人が賞めるからして、當人なども之を善いとの樣に心得て居るが、實に馬鹿氣た不見識の事である。ナゼに、左程に國家の爲に失望するのである乎。國家と云ふものには、人物さへあれば、ドンナ騷ぎがあつても憂ふるに足らぬ。然るに今ま汝が左程な失望を表て泣言を言ふのは、自分が其の人物になる丈けの勉強さへせぬと云ふ自白ではない乎。夫が何によつて公け事に口を容れる權利がある乎。

◉人生五十、學なきを耻づ、學とは、吾が本領の心地の爲に修むるものと、人を救ひ世を益する爲に修むるものと、二つある。然し、其の二は二ならず、つまりは一に歸する歸一法玄の妙諦に入るものであるから、如何に、何處に、ドンナ事を爲さふとも、學び且つ修めて、人物となる工夫をせぬほどならば、男にせよ、女にせよ、採るに足らぬものである。其の智を十分に磨くべし、其の膽識を十分に養ふべし、其の伎倆を十分に工夫すべし、其の品格德本の根元を十分に築くべし。左すれば、或ひは以て國家の御用に立ち、其の憂患を救ふを得んか。生きて甲斐ある人の一生と云ふものは、先づ此邊に存するので、左なくんば、速かに羽化登仙して、早く彼着の理想境に悠遊することを希ふ筈である。

支那の愛國者

◉愛國者が國を亡ぼすと云ふとは、今日の支那の如き場合に於て言ふとである。なまじひに國家々々と叫んで、國家の爲に夷狄の跋扈を憤ふり居る義和團の連中が、陰に外國人に煽動されて、無益の騷ぎを起すのである。

◉こゝに到つて見ると、只だ錢金を溜めると許りに役々として居る下等の支那人の方が、つまりは、支那國の益になるのである。たとひ國亡びて、清朝代るとして見ても、此種の支那人は矢張り外國人からもうけて、富んで、即ち支那の山河を肥やすものである。眞とや、人生の根事はかゝるものか。愛國者が國を亡ぼして、國家の事を念頭にも置かぬ族が、つまりは、忠臣義士となるのである。

◉然し、義和團の連中をたゝ一概に輕蔑してはならぬ。御殿山の公使館を火いた攘夷黨が、他日文明政府の總理大臣となるのであるから、頑固々々と云つて、無やみに笑つてはならぬ。支那などは、大國であるから、人民に血のめぐりが遲いのは已むを得ないのである。

◉今の支那の出來事は、別段珍らしくはない、只だ三十餘年前の日本の御一新前後の事を仕掛て居るのである。あゝ云ふ騷ぎを幾度もして、夫から御一新となるのである。國が大きいから、日の當りが後になつたので、日本は小柄であるから、先づ早く無雜作にやつた丈のとである。然し、支那は、土地が廣いから、此の騷ぎで、其土地の幾分を割くともあらふが、支那大國にとつては、左して驚ろくべきことでもあるまい。

◉今度の騷ぎなどは、一二の外國が拔がけの功名を仕様としたのを看破して、既に列國の共同軍を繰り出すに到つたからは、先づ其の結末も法外なとにはなるまい。公平なる文明流義の進步を催促するとになつて、つまり利益ある結末を見るに到るであらうと信ずる。（六月仲八、獨逸公使逆殺されたりとの風說初めて聞ゆ）

善く行く者は轍跡なし、善く言ふ者は瑕謫なく、善く計る者は籌策を用いず、善く閉る者は關楗なし而も開く可らず、善く結ぶものは繩約なし而も解く可らず、是を以て聖人は常に善く人を救ふ、故に棄人なし、常に善く物を救ふ、故に棄物なし、是を襲明と云ふ。

評　論

「己が罪」と菊地幽芳

（日本文壇の新生面）

朝天行

實利實益の外に別乾坤を解せさる俗人窟のとて、浪華の蘆の束のまゝも十方遍照の黄金佛に歸命頂禮の咒文を唱へて、金色の光り赫灼たるを福貴繁昌の理想となし、その御利益の現れんとを夢忘れさる關西の大都民なれど、さすがに昔は巣林子の世話物に、泣の涙を灑ぎたる涕男のあればにや、一たび近時の大作「己が罪」の、大坂毎日の紙上に續載せられて、關西幾万の涙の動物は、實利實益の外に人情美の世界あることを、今更の如く悟りたりけん。驚くべき悲劇を以て序幕を開かれたる斯小説の、驚くべき一道の大光明に觸れて、希望と慰藉と安心立命の妙締とを傳へて、大喝采の中に全篇を畢るに至るまで、巣林子の聲に狂ひて當時幾万の子女が大懊惱を試みたるが如く、近世文學の新舞装を準へる關西唯一の青年文雄の爲に、何に感泣懊惱の聲を擧げたりしよ。

我は「己が罪」の女主人廻る因果の環の境遇閲歷、かれの理想、かれの性格、かれの悲劇、かれの化脫、かれの救の徑路などを觀察し來る每に、紅露一流の筆致を以ては到底敍述し能ざるか如き特殊の妙趣ありて、中央文壇に相對する關西文壇の地位は、渠を俟て始て新生面を開拓し、紅葉の筆路の俗臭多きと、露伴の着想の抹香臭きに反し、別に崇高優大なる理想と幽麗神韻の詩才とを相融化して、此處に渠等の最特長を綜合せるのみか、その着想結構に於て世界的及び普遍的なる我邦文界の大底流を摑寫するに至りては、紅露たるもの到底顏色あるべきにあらず。我は靜に顧て當今の文壇に紅露以外一頭地を抜くもの二大文雄あるを見る。一を中央の柳浪氏とし、一を關西の幽芳氏となす、我知人某が柳浪氏の「今戸心中」を評して、ダマスコの門外に於て天地古今の秘密なる大靈光に腦底を撃破せられたる使徒保羅の心機妙變を、特殊の事情を借てこれを高吟せる者なりと謂ふか如く、若し「今戸心中」を以て保羅の心機妙變に比すとを得ば、我は「己が罪」を以てモーセか百萬の以色列民族を卒ひ、猛悪無道の埃及王

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の毒手を脱れいで、四十年の間古今無類の悲劇的大旅行を演じ、遂に蜜と葡萄汁の流れ出るカナンの樂土に入りたるか如き希望慰藉の大福音を、具躰的に敘述したる者なりと謂はんとす。

柳浪の一氣呵成の雄文、天外忽落の奇想に至ては、紅露一流の甚た纏綿き處にして、亦幽芳の優美灑脫の筆致、白雲華顏を掩ふの詩想に至ては、渠等一派と大に徑庭を有する處なるを恨む、固より文と謂ひ想と云ふと雖も各自の個人性を離れて存在する者にはあらで、十人十色と形容するが如く文士互に天賦の特性を有し、其特性に從て獨得の天才は發揮せらるる者なるを以て、我は紅露一流の特長と其才能とを否まむとするにあらねとも、我邦既往の文壇殊に創作界に於ては、殆むと紅露一流獨占の舞臺にして、意氣昂然當る可らざるの優勢を有するが如く、讀書社會が甚しく渠等の勢力を過大に誤認せるを以て、東西文壇の兩雄幽柳一流の新勢力を識認せしめざるを得ざるなり。然れども文士相互の人生觀に至ては、露伴が紅葉と雲泥の差異を有するが如く、幽芳と柳浪とは天地霄壤の別あるとを識認せざるを得ず。世上幾多の閱歷蓄想ある讀書家か、紅葉の作物よりも露伴の大作を歡迎するが如く、我は柳浪の奇拔なるよりも、幽芳の深遠なるを尊重せずむばあらず。我は實に「今戸心中」以前固より「今戸心中」なく、「今戸心中」以後亦將に「今戸心中」なしと云ひたき程に、渠の創作物の意味深きに驚歎すと雖も、こは唯人生の或變局の中にも尙且最高調の人情美の發射するとを縮寫したる者にして、波瀾幾層、變局平局、黄吻兒の端倪す可らさる人生の全局を概括し、人生の經過、進歩の徑路、人生一貫の意義、萬古無窮の大潮流を光明暗黑倶に描寫し來て、人生行路の悲哀絕望の士人に希望奮闘の復活力を與ふる者とは、頗るその趣致を異にする者と謂さる可らず。

若し保羅の心機妙變が審美的意義に於て人生一部の變局を希望的に縮寫したる者とせは、モーセ四十年のアラビヤの行路は、人生經過の全局を樂天的に描寫したる者なるが如く、柳浪の今戸心中は小說として優に傑作なれども人生の一局部に過ず。幽芳の已が罪は殆むと三百回の長篇なると共に、人生の全局を概括し、その徑路、その變遷、その悲觀、その絕望、その慰藉、その救を、人情豊なる宗教家の如く、理

想高き詩人の如く、慘憺至極の人生の悲觀的側面に向つて一道の大光明を翳しきたる天使の如く、人生と理想の妙趣を涙紅に情濃なる筆致を以て高吟せる者にて、更に他の方面より觀察せば、墮落せる今日の新聞小說の上に別乾坤を開拓したる者なり。故に今戸心中か絕望悲痛の情死の中に、心機妙變の捕捉す可らざる人性の妙義を道破し來たるよりも、その人生觀の深遠博大なる者を視むとせば これを幽芳の己が罪に徵すべきなり。

我は菊地幽芳とは未見の間柄なれば、その人物の如何なる調子の者なるやを知らず、然れども浪華の文壇に一片稜々の意氣を有して、空く憤死せる造士新聞の不孤が幽芳に與る訣別の公開文に見るも、その至誠熱腸を有する關西有數の文雄たるとは、明にこれを識認し得るのみならず、亦將に關西文壇が清高深遠なる渠に依て千鈞の貫目を有することも、明白なる事實ならずむばあらず、殊に渠が男主人櫻丘子爵の對話に依て歌ふ處の人生觀の如きは、義人內村氏が例の熱舌を弄して女郎文學と痛罵せる明治の小說院本中、殆むと我には空前の人の聲にて、亦その人物の品格性情の如きは、男女兩性とも清健潔白の紳士淑女を書き出して、墮落の中にも聖潔の品正を慕ふ目下の人心に、餘情ある微笑を堪えしむる者あり、我は己か罪の前編に於て戀愛神聖主義を採れる理想高き品正美しき淑女か、墮落書生の存在に寛容なる不德社會の、手練手管の大渦中に陷ると同時に、腐腸漢の奸計は側面より突忽として現れ來る、意外の事實に依て暴露すれども、浮ばんと欲して浮ぶ能ざる破倫の深淵に沈める彼女の品正は、花片楸落むなしく泥土に委したるが如く回復す可らざるに至り、精神錯亂、沈憂落魄、心膓九回すと雖も奈何ともする能ず、死地に陷て自らの罪を贖はんとし、或夜、曚朧暗澹、陰府路にかよふ宵を侵して獨靜に品海に至れば、天道未だ此悲哀の女性を棄てざるにや、旻天に訴る祈禱のこゑと共に、其身の行末を一抹の水泡に委せんとする時、後より助るもの在て其夜恩人の宅にて產れ出たる私生見、これ後篇に現はるる玉太郎と呼ふ男の見なりき。渠は此篇に於て墮落せる社會が惡き境遇を造て、か弱き婦人の品正を奪ふの殘酷なる有樣を叙し、以て己か罪の所以を明にし、更に後篇に至て斯る薄命に遭遇せる佳人のことなれば、

再び他家に嫁せざることを心に誓ひ、言葉を以て形容す可らざる悲痛を抱ひて、天下茶屋の實家に在て浮世の無情を嘆ちゐける時、京都の華族にして細君の不德を憤て之を離別したる櫻戸子爵なる者ありて、到底信任す可らざる女性の弱點を觀破したる渠は、環が男性に對する大悲觀と相俟て人生婚姻なる者の意義を否定せんとする、一個の精神的負傷者を現はし、陰に環が己が罪の秘密に對して煩悶の念を抱くと共に、櫻戸子爵が婦人の不德を憎むこと甚しき者あるを示しぬ、斯る間に櫻戸子爵を代表する某貴夫人と、環を代表する實父とは相互を結び付ける連鎖となり、子爵は某貴夫人に奬められ、環は己が秘密を知れる實父の硬制に强られて、心ならずも合歡の式を擧るに至れるのち、良心鏡破なる彼女は持病のヒステリー症を再發し、根本の海濱に行きて保養すべく在りけるに、計らずも前編の私生兒玉太郎に出會すると共に案外の珍事より環の既往の罪は悉く其夫隆弘の識る處となり、神の正義の觀念に支配せらるる渠は、全く環を離緣するに至て俄然天外忽落の出來事は、相互の係る干係を表面に發表せさるととなり、遂に再度の失望落胆に打れたる隆弘は、非常の痛恨を抱ひて外國漫遊の途にのぼるに及び、渠の人生觀は斯行に於て根本的に變革を生じ、正義の神の立脚地を離れて基督の聖愛の上に思想の根定を据ゆるに至り、環の秘密の罪を宥して渠が自己に捧げる聖愛の最後を完ふせしむるを以て大團圓を告けたる者、要するに幽芳が罪に對する觀念は、其大部分の責を社會と其境遇とに負はしめ、以て環の如き純潔なる淑女をも罪惡に沈淪せしむる其眞相を明にし、更に進むで人生を解せんとせば正義の觀念よりも、仁愛の思想を以て觀察するにあらざれば解釋しえざることを縷述し、神の正義を殆むど否定して基督の仁愛を說くに至れり。これ若燕の人生觀と同一の立脚地にして、或者は斯小說を以て新日本に於ける宗教小說の先登なりと謂ひ、或者は人道の一面を明にせる世界的文學の嚆矢なりと謂ひ、亦或者は暗黑より光明に進む人生一貫の意義を示せる人情哲學なりと謂ふ、我は固よりその批評の當否を知らず、唯露伴の理想高きが如にして人道に對する意識の薄弱なると、紅葉の人性の皮相の波瀾を寫すに巧にして、人情深奧の妙機を描くに粗漏なると、柳浪の或變局の人情

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

美を深刻に攫取するに妙を有して、その人生觀の崇高深遠なる者なきとに反し、幽芳の己が罪に現れたる人生觀は、その寫實の妙、その筆致の幽なると相俟て、當今獲易からざる大文字なりと謂さるを得す。換言せは紅露柳逍等の文界の四天王か或社會の變局のみに着眼して、人生行路の全面と其理想の精華とに根本相を据ゆる能はさりしこの一大空虚に乘して、渠か天地に遍通する人生の根本意義を促へてその幾部を解釋するに至れるは、日本當今の文壇に新生面を開拓したる者にて、我の最も多とせさるを得さる處とす。吾徒たる者渠に向つて滿腔の同情を表す可きなり。

三遊亭圓遊論

青柳有美

《圓遊は威風堂々たり》
《圓遊は深酷鋭利なる觀察批評家なり》
《圓遊は人を笑せつゝ泣かせ泣かせつゝ笑はす》
《圓遊は人を慄せつゝ笑はせ笑はせつゝ慄はす》
《圓遊は天下の一品なり》

希臘人が抱懷會得せる優麗典雅なる思想の、其彫刻と其美術とによりて、發揮煽揚せられたるは、萬人皆な之を知る。偽善者も倘ほ且つ暮紅によりて明日は晴れならんと言ひ、朝紅また曇によりて、今日は雨ならんといふ。それ隱くれたるより現はれざるはなく、蓄へられたるより知られざるはなし。人の風貌は能く其智能と靈感と德性とを權現祖述して、遂に餘蘊なきに至るものなり。誰か能く之れを覆ふべけんや。世もし人ありて、三遊亭圓遊が容姿相貌に觀察せば、必ずや一見その威風の堂々たるを備へて、三軍の士卒を叱咤督勵する大將軍の貫目あり、容易に動かし冒すべからざるに驚くべし。人よ、爾曹のこゝろ若し美はしき衣を着けたるものを觀んとするにあらば、乞ふ去りて王の宮殿に參れ、若し觀兵式の大將を觀んとするにあらば、燦爛たる正服に其身を飾りて、酒池肉林の間に放歌亂舞し、しきりに太平の夢を貪らんとする當世の如才なき軍武官に往け。されど、誠に威儀風貌の、嚴然として堂乎たるを仰がんと欲せば、願くは我が三遊亭圓遊に觀よ。その秀でゝ優ぐれたる鼻は、數々愚かなる聽客のために、好笑嘲詼の材とせらるれども、明かに品位の尋常ならざるを示し、その布袋の如く垂れ脹らべる

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

耳朶と、強く締まれ口と、また斜に天を仰ぎつゝ怪しき睥睨を逞ふする濶然たる眼さしとは、皆なこの人が非凡の一異彩にして、當代に傑出せる一英靈漢なるを現はさずや。今や邦國の諸人、漸く藝術を重んずるの心厚く、繪畫彫刻文藝の士を敬し、俳優の如きをも稍々其念頭に置くに至りしと雖ども、所謂藝人なるもの、殊に落語家講談師等の階級に向つては、多くの尊敬を拂ふこと吝かなるに似たり。中に圓朝と如燕との二人者のみ、その武士的修養あるの故に、頗る世の宣揚するところとなりしも、其他は措いて問はれず、恰も彼のシエークスピヤの劇曲などにて見らるゝ道化役の如く、たゞ戯り弄んで、戯れ嘲するに好き劣等人種を以て看なさるゝに庶幾し。その些かの敬意をだも之れに表することなきは何ぞや。

圓朝は、其人物素より廣濶にして海の如く、甚だ抱容に富み、各面各種の異分子を容るゝの作懐温情あるべしと雖ども、技能の秀拔敏逸なるは、都て其門下の或る一人者に及ばざるべく、徹底のうち自ら臻らざるところあり、綽然として亂れざる如きは、即ちこれあらんも、堂々として四隣を壓倒するの痛慨なる意氣に至りては、遂に望むべからず。故に圓朝は、遠き希臘の世に其智識と思索との精到なるは、遙に後代の二人者に及ばざるところありて、しかも能く唯心を專らとせるプレトーと、唯物の稱道に熱實せるアリストートルとを抱容して、共に我が胸中に逍遙するを得せしめ、毫も矛盾するところなかりしソクラテスに似たりといふを得べけんか。此の如く圓朝にして果してソクラテスたらば、圓生は則ちプレトーに似て、我が圓遊は夫れアリストートルたるべきなり。その覇氣充滿制へ難く、直に人の肺肝に肉迫し、利劍を提げて其胸を貫かんとする如きは、是れ圓朝の有せざるところにして、我が圓遊に於て始めて之れを看るべきなり。弟子は其師に勝さる能はずとは古語の教ゆる所なれども、アリストートルと圓遊との如きは、所謂藍より出でゝ藍より青きものといふべき耶非耶。たゞその悠々自在の大度あること師の如くなる能はず、偏局拘泥の傾きあるを恨みとするのみ。

又今の世に小説家なるものあり、批評家なるものあり。觀察精細到らざるなしと稱すれども、之を三遊亭圓遊の、更に一層微細精到にして、社會の一些事人情の一機微をも苟ふせず

巧にそのうちなる奥義と趣味とを批評解剖し、縦に之れを開展して、何の苦み滞ふるところなく、恰も大人の侏儒を其の指頭に弄するが如くなるに如かじ。我れの圓遊を推重鼓吹して措く能はざる所以の一は、即ち其批評眼の英敏にして甚た非凡なるものあるにあり。然れども、圓遊が其思想發展の機關を、文章に取らずして言語に取り、刊行の紙上に於てせずして、定席に於てするの故に、世人の多くは、其思ひ是處に臻らず、天下の偉傑を尊恭畏敬するの道を忘れて恬然たるものあるに及ぶ。悲しからずとせんや。しかのみならず、此の如きは誠に是れ我が社會の偏僻盲目にして天與の偉人を看る明なきを表白するものにして、眞に恥づべきことなり。それ言語は文字の母なり。之れを美術に就て譬ふれば、言語は音樂にして文字は詩歌に似たり。言語の妙は却て文字の上にあるものを。言語を操つるの難きは、文を舞はすの難きよりも難し。今の文士と稱ふるもの丶うち、其文の巧みを我が圓遊の言語と競ひ得る果して何人者ぞ。然るに何事ぞ。彼れは獨り重んぜられて、這れは即ち輕んぜらる。我れたるもの憤らざらんとするも、豈に得んや。

嘗て博文館の祝宴に、『義士赤垣源藏』を聽く。時に席にあるもの實に百を越え、皆な以て當代知名の人士なりと稱す。しかも我が圓遊の諧謔縦横滑稽百出の圓轉滑脱なる口調と、奇警矯激の觀察批評とに頤を解ひて笑はざるものなく、一座は宛然波を揚げたるが如し。されど、忽ちにして又嗚咽の聲其處是處に起り、手巾を出して其眼の潤へるを拭ひ、涕の鼻に溢る丶を拂はざるものなし。而して又直に笑ひ又忽ちに泣くなり。此くの如くにして能く笑ひつ丶人を泣かしめ、泣きつ丶又能く人を笑はしむること、是れ圓遊の一大特技乎。近頃再び同じ讀物を神田若竹亭に聽て、此の非凡の技量に感悦すること益々深し。今の所謂文字を職業とし、或は詩人と稱し雄辯家と稱ふるもの丶うち、たゞ能く人を動かして感激々甚、聲をあげて泣かしめ得るものはあらん、又能く人を揶揄して抱腹絶倒口を開ひて高く笑はしめ得るものはあらん。されど是等の君子は、單り泣かしめ得るのみ。單り笑はしめ得るのみ。若し夫れ我が圓遊の如く、泣きつ丶笑はしめ、笑ひつ丶泣かしめ得る兩天秤の離れ技を逞ふする能者に至りては、眞に一人だにあることなし。然り、全帝國の文壇と講壇

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

その總てを擧げて、我が三遊亭圓遊の外、遂に一人だにあることなきなり。また神田立花亭に其得意の讀物なりといふ『野晒』を聽きしことあり。悽愴陰暗の氣、鬱然として我が魂を襲ふ。されど、又忽ちにして放笑せざるべからず。一たびは戰慄し一たびは、おとがひを外し、而して又二たび三たび戰慄し、三たび四たび放笑す。何等の妙絶ぞや。是に至りて三遊亭圓遊は、げにや、人士其比を觀るべからざる天下の一品なりといふ、蓋し過言に非ざらんか。藝術に愛着執戀する世の友よ。乞ふ我れと共に斯の天來の大鬼才を敬重憚畏せずや。

聞く、此の如く非凡の批評眼と深酷鋭利なる觀察眼とに富み、しかも其言語を操つるの巧なること、今の滔々たる文士辯士學士家の上に優り、能く泣きつゝ笑はしめ笑ひつゝ慄はしめ、其威風の凜然冒すべからざるものあること古武士の如く、當に當代の一偉觀を以て目すべきこの傑人は、來る七月より自ら高座を退ひて、たゞ私の招聘に應ずるのみに止まるべしと。豈に近來の恨事ならずや。門弟左圓遊の如き、甚だ深く其師に親炙して、殆んと全く其影を寫すに近しと雖ども、未た相去るや遠し。圓遊の退隱はまことや、大政治家が其舞臺を去りたるにもまさりて、當代文華の飾りを衰へしめ、我儕藝術の愛翫者をして、寂寥を覺えしむること、層一層非常なるものなり。君、なほ頽齒耄弱の齡にあらず、幸に其思を翻して、長く高座に其堂々たる威風を仰ぐところあらしめんことを。

（書き終れは、我れながら其文字に乏しく文辭の拙なるに驚く。我れは到底文な樂むべきの士に非ろ乎。嗚。）

亞米利加だより

善し惡し草

筐下庵

（一）愛國詩人

「The Cheer Boodyard」とさもなつかしげに廣告せられたる結果はキツプリングの飜譯となりて現はれぬ、今やキツプリングはふらんすにだてすら愛讀せらるゝに至りしぞいともめでたけれ、愛國詩人！戰雲あんたんとして歐米の天地を覆へる十九世紀末は汝が月桂冠を受くべき時ぞかし、何事も愛國な

らずば夜のあけぬ今日此頃イムペリヤリズムの流行するも無理ならぬば詩人の此肩書なくては通らぬもことわりぞかし、聞く彼が小說の一字は能く二十五Cを値し、其一著作に對つて受くる所の報酬殆ど內閣大臣の年俸に比せらるべしと、これ實に先人の未だ嘗て夢想だもせざりし所、抑も彼か歌ふところは何物ぞや、只だ Warlike passion. のみ只た愛國のみ只だ熱なき短篇ものがたりのみ、情けなきかな、嘗て沙翁をはぐゝみし國民もヂッケンスを育てし國民もバーンスやキーツやバイロン、シエーレーを產みたりし英國も今はまたかゝる詩人に浮るゝに至りしとは、ゾラ彼を評して云へり「キップリングは殆んど兵士にしてまた、らつぱ卒の如し」と盡し得て妙と云ふべし、何者のたわむれぞ。キップリングを以てテニスンに比したる大陽文學記者の如きは天下無雙の愛國者の類にてもやあるなるべし。

(二) 輿論宗

強者の權利と云ふもあれば、輿論の權利と云ふもあり、強者の權が輿論の權乎、輿論の權が強者のそれ乎、吾未だこれを知らず、御都合主義なるかな、輿論主義なるかな、今の世にもてはやさるれば汝は輿論の認可を經しものぞ、日本主義はやれは此主義を仰ぐべく、帝國主義流行すれば直に是に加はるべく、拜金宗稱へらるれば走て其徒とならば、少なくとも輿論にもるゝことはなからむ、輿論は何處にもいれられ、輿論に敵なく、輿論の行く處として適せずと云ふことなし、近頃學者あり輿論主義を說く、論や最もめでたし、その意はと問へば、實はちと輿論宗を習つて出世がしてみたいから。」

(三) 日本的基督教

宣教師的基督教とうとんぜられて日本的基督教の聲を聞くや久し、日本的とは何にぞや、思ふに日本的なる文字ほど意義の曖昧なる字はなからむ。ぬらくらとして海鼠の如し、同志社は日本的主義に依りて徵兵猶豫の特典を得たり、昔日のカレーヂ制度を失ひて文部省的中學制度を得たり、明治學院も麻布英和學校も青山學院も皆な新に生れたり。然れども其殊色や失せて色なく土の如し、學生は古所謂人殺學校の同形を出さんとしつゝあり、何等の醜ぞ、敢て問ふ、宗教に日本的

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

なるものありや宣教師的なるものありやと、狹くるしきかな、吾が教界も日本的なる文字を用ゆるに至りて、其醜や極まれりと云ふべし、眞理は世界の共有なり、天地にわたりて廣く且つ高し、何すれぞ、妄りにけがらはしき國家の形容詞をかるの要あらむ。一層僞善のどもがらよ、汝が良心に深くかへりみて、いさぎよく其腐れ信仰をすてよ、基督も神もあつたものかは、僞りなき人の心は光々として天上の月の如し、日本的基督教の聲漸く高まり來りて、眞の信仰漸く其跡をたゝんとす、慨すべきにあらずや、トルストイ曰く「宗教とは何にぞや人の生命それ自身たり、自ら求め得べく、傳道すべからず」と蓋し至言と云ふべし。

(四) 悪魔の手からパン

扨ども熱心にパンを得んことを神に祈り居りし一老婆ありけり「神様よどうぞ、賤しき此僕に一口のパンを與へ賜へ」。人あり窓よりこの様をのぞきみて、何とか思ひけん、走りてパン屋にゆき一個のローフ、ブレッドを得つ、窓よりそつと投げこみぬ。老婆嬉しきに得たへず大聲あげて感謝の祈りを捧、げはじめたり、同じ男かくと見しや老婆のうしろより其肩をたゝいて曰く「神様ぢやない、わしがあの窓から投げこんだのだ」、老婆けゞんなる顏して、くだんの男を打ちまもりゐしがやがて徐に口を開ひて曰ふやふ「それぢや神様が惡魔の手から、私にパンを御恵みなされたのだ。」

(五) 文明はきらひです

日本の友より得し紹介状のありければ、一日去る熱心の基督信者なにがし婦人を訪ひぬ、談は日本の市街の事にのぼれり婦人曰く「日本にもトロリーカーがありますか、高架鐵道は如何ですね、隨分めづらしいものが米國には多いでせう」吾曰く「左様、日本も案外歐米化してゐますから、くだらん物が出來ました、何に立派な建物ですか、少しも驚きませんな、僕は寧ろこんな立派な建物の中に如何してから僞善醜行が行はれてゐるかと、これが亞米利加に僕のあきれた一ツです」婦人曰く「それぢやあ、あなたは米國はきらいですか基督教も―」吾曰く「僕は文明は皆なきらひです、基督教だつて文明的なら」婦人默然たり、憤然たり、われまた之より彼

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

女を訪ず。

(六) 老婆帝國と印度人

「誰か買つてはくれませぬか、この子を、誰か買つてはくれませぬかへ」と聲あはれげに、無邪氣にして可憐なる己が小兒をその頭に負ひつゝ、街を賣りゆく印度婦人あり。その聲は細り、その姿は痩せて恰も死人の道をゆくが如し、唯だ一日の餓をしのがんがため、唯だ僅かのパン代を得んがため、みすみすも愛兒を生涯の奴れいとなさんとする也。好みてなすにあらず、止むを得ざればなり。誰か人として己が兒を知らぬ他人に賣るを好むものあらむ、誰か知りつゝも奴隷の苦海に沈む愛兒を喜びて見るものあらむ、好みてなすにあらず誠に止むことを得ざればなり。罪、誰にあるぞや、利己主義をもて起ち、植民地政略をこれ事とする悪婆が國の、正直なる農民を詐りて、其豐富なる天然の所有を盜みとりたる結果にあらずして何ぞ、口に甘たるき言葉を用ひて、外に文明の美しき衣をまとひて、腹にぬす人の心を蓄へたる汝は禍なるかな、近時、悲慘なる餓死の報道は印度より來ること頻りなり、痛恨豈に讀むに耐へんや、所詮イムペリヤリズムは自由の敵にして、人道の賊なり。吾輩は絶叫して、かのゾラと共にLámi du humanité. をもて任じ、飽くまでも英國的領土擴張主義の不正に反對せざるを得ざる也。

(七) 予は戰亂の賊とならむ

人あり問ふて曰く君は何人を尤も好み賜ふや、政治家としてビスマルクにやヂスレリーにや將たグラッドストーンにやと、吾曰ふ然らず、彼等は予が最もすかぬ所の好標本なり、ビスの國家主義なる、ヂスの俗腸滿々たる、ゲラの平々凡々なる彼等遂に何するものぞ、予は寧ろロベスピエールを愛せんかな、クロンウエルを擇ばんかな、客驚いて曰ふ、そは君の平生に似合ぬぞかし、文學は平和の友なり。然るにロベスピエールやクロンウエルは平和の友にあらずして戰亂の友にあらずやと、吾答て曰く、然り戰亂なり、戰亂なり、予は平和の詩人たらむよりは寧ろ戰亂の賊とならむ、うわぬり文明の謳歌者たらんよりは寧ろ革命の血を流す人とならむ、客即ち依々として去る。

天下かくの如きなまぐさ牧師の滔々として、ひくひくし居るぞ是非もなし。

（八）信仰うすきものよ

吾友それがし、平生頗る眞面目と過默をもて同人間に稱せらる、一日予微痛を病む、彼來りて予のつれづれを慰む、坐に牧師なにがしと云ふあり、談偶ま基督敎にわたり、佛敎に及びつ、比較宗敎論となり、印度哲學の批評となり、遂に政躰論とまで進みぬ、友曰く「然らば君は全然僕の所謂共和政に御反對ではないのですな、只だ不完全なる共和政の現行された結果が惡るから、先づ當分不道理でも英國流の帝政憲法主義に御贊同なさるので」に「ない、全くの所、私は貴見に一ッも反對の點はないのです、反對の點はないのですが、ないですが」と牧師言ひきり得ずして友の顔色を潜にうかゞふものゝ如く然り、眞面目に耳傾けゐし友は、忽然電雷の如く大聲疾呼せり「ふゝむ、わかつた！駄目です、駄目だ、到底駄目です、止し賜へ、傳道なぞ君に出來るものか、そんな腐れ根性で何が出來る、君らの先師たる基督は曰ふたぢやないか。あゝ汝等信仰うすきものよ」と牧師先生顔色なくそこそこにして坐を起ちぬ、あとにてきけばあの人はひどい人だと

（九）dont Look nice

昔は支那に禮儀三千威儀三百なる語ありけり、ふるあめりかにはうわぬり三万、めつき十万あるぞかし、見へ可ならざれば、何事も捨てられ、見へ可なれば馬の骨も紳士となり淑女となる、料理にてすら、味よりも先づ見への如何を問ひ見へ惡しければ味可と雖も、dont look nice の一言に捨てらるゝをかし、髮はうるはしく櫛けづり、香よき水にてうわぬりすれば、何人も紳士となりすまさるゝものぞ。傳へ曰ふ牧師に一日鏡前十回の義務ありと、そは何故ぞと人の問へば貴女紳士の前に接近すること多きもの、必然の義務なれば也と蓋し一片の惡口なるべしと雖も而も半面の眞理は確にあり。然り米國の紳士となる誠に易々たるのみ、いはゆる沐猴にして唯だ飾りするものゝ。註して曰く——5Ce Shine. + 15Ce Shave = an American gentlemen.

（十）舞蹈會

「今宵君はさるクリスチャン倶楽部の舞踏會にゆき賜はずや」と誘はれたるまゝに諾して行きぬ、蓋し生れてはじめて舞踏會なるものに參するの榮を得たればなり、へんぱんたる佳人美女やんごとなきわかふどに抱かれつ、抱きつゝ、浮かれたるピヤノの曲におもしろく合せて舞ふのさま、宛として春の野の花に狂ふ胡蝶の如し。「何故に來りて共に舞ひ賜はざる、君は舞踏は好み賜はぬにや」とうつくしき御方の最も優しく問ひ賜ふ。吾、脚わぐるすべさへも知らぬ、しれ者いかで、かの美しき人を抱き得んやと獨りちいさくなりてホールの片隅にツンヂユラエルの冷たき水に火の如くなりし顔をばひやしぬ家にかへるや嘆息すらく、「舞踏會も矢張文明的だわい」

(十一) 人よりもけもの

ロサ、ボンヌールは先年みまかりし佛國の閨秀書家なり、獸を描くをもて一家をなし、妙技殆ど及ぶべからずと稱せらる、嘗て獅子の兒を養ひ恰も人の子の如く、保育愛撫至らずと云ふことなし、然れども不幸にして彼は身最と弱かりし、一日ロサは常の如く彼の寝床を見舞ひしに如何にも弱り果てたる様なりけり。ロサ二階に歸へるや間もなく、階下に少さきものゝ歩みくる音しければロサ至り見るに、果して彼なりけり、蓋し彼は最早已が最后の近づけるを知りて、愛するロサを今一度見んとてなりき。ロサこれをみ、嬉しさに得耐へで、そのまゝ彼をば己が腕に抱きしめつ傍の友をかへり見て云ふやう「世の中には愛と云ふ貴きものを知らぬ人の子もあるものを、吾が愛兒は生れて獸と雖も、如何に能く愛を解し愛を實行せしことぞ、嗚呼情を知らぬ人よりも妾には情を知るけものこそ」。

西洋人も東洋人も同じ樣にセクスピアの戯曲に涙を落す人情同じければ也。心理學は東洋にも西洋にも同じ樣に行われ、教育學も、倫理學も東西ともに基礎を同ふす。然らば東洋人も西洋人も、もろこし人も、こま人も、人間に變りはなし、五十歩か七十歩せい〴〵百歩の相違なり、仙人も俗人も君子も惡人も到る處におり。文明と云ひ野蠻と云ふは、禮儀の濃淡と、交際の上手下手と、時のハヤリ人氣などによりて與へられし名なり(城北隱士)。

女學

女子靜里の大意

新井奧邃

此れは女子の里なり、身と心との居る所を里と爲す、而して今ま之に冠するに靜と云字を以てする者は、蓋し、居は靜德を以て善と爲せばなり、各々靜かに其胸中を開き、靜かに其身心を理め、思慮りを愼みて、外誘の私に惑はず、心ろ志しを平にして、能く他人の情意を解き、臆察せず、私斷せず、忠恕の道を以て、靜かに天性協和の義を行ふものは、此れ靜の德なり、各々靜かに中心の厚情を脩めて、交互誤謬の見に遠かる者は、又靜の德なり、人を知らんと欲して、己れに反省し、滿開の心を以て、靜かに萬物を其身に觀る者、又靜の德なり、各々靜かに能く相愛して、靜かに能く相協ふ者、此又其德なり、天の公明よりして之を視れば、天下皆兄弟姉妹なり、故に姉妹の務めを盡し、淺きより深きに入り、狹きより廣きに及び、日に新たにして、又日に新にする者、此れ靜の善德なり、上天の盛んなる、掩はざる所なく、入らざる所なく、盈たざる所なし、其靈光、我か中外を貫きて、其博愛我か性情を感す、舍てずして救ひ、忘れずして思はる、此の處、天を慕ひ、神に謝するの心を以て、靜かに考へて、靜かに得る者、又善德なり、凡そ如此者は、皆人の貴しとする所にして、而して女子の居に於て尤も然りとす、故に之を名けて、女子靜里と曰ふ、

附言

本里は、默識を以て主と爲す、人に知らるるを求めず、故に員中には、其里の爲めに著書作文せず、各々心解を以て要と爲し協愛を以て道と爲す、

本里は、精神一結して、古の秘密社の如きものあり、然れとも其外貌の交際は、則ち温厚自由にして、唯だ嚴に其中心膏血の世に漏洩するを防く、此れは、靜の默にして知たるものなり、

本里は、來者は拒まず、又た從容として之を受く、往く者は追はず、又慇懃に之を送る、此れは、靜の忍耐にして自由を贊する者なり、

本里は、名譽を求むるの心なし、貨財を聚むるの望みなし、

又流俗に從ふの思なし、但た其天性自由の道に從ひ、厚情を以て相遇ふこと、眞の姉妹の如くなるのみ、

其姉妹の會するや、或は一家に於てす、或は他の家に於てす皆な其便宜に從ふ、而して臨時に、家務、或は他の故の爲にして、不便なる者は、必しも出席せず、而して全會は、了然として之を心釋す、蓋し其心大にして順なればなり、

其出席せざる人は、自宅、或は他處に於て、協同和愛する所の凝神を以て、靜かに全會に心通することを求む、此の言は新奇なるが如しと雖も、其事は能くすべからざるに非ず、斷じて能くすべし、此れ靜里の道に於て、實に第一緊要の處たり、凡そ月を積み、年を累ねて、衆人一體となり、其動くや千百も一手の如くにして、善を天下の廣きに爲すに至らんも、皆此の道に由らざるはなきなり、是故に、各々自ら省るを以て本と爲す、之を尋ねて、又之を尋ね、之を誠にして、又之を誠にす、自ら修めて已まざるなり、夫れ然る後ち、靜徳の安寧を得べし、

本里は、男子の扶助を請ふこと無し、女子靜里中、自ら其事務を導く、此れは靜の默にして而して自持する者なり、

本里は、長幼の序を以て列す、其標的は、素より心を正ふし徳を修めて、其事業を盛にするにありて、會合の際には、之を無用の言語に求めず、之を事務に求む、理談を去て、實地に就く、實地とは何ぞや、姉妹、厚情日に進み、協愛日に深く、以て眞に天公のをんな子孫たるに愧ること無きに至んと欲する、その精神と、實交と、是れなり、各員もし此に從事せば、則ち此より以上の天職は、言はずして知るべし、此れは、靜徳の盛なる者なり、

女徳如此に脩りて、而して男社會と（男社會別に共學有り）相待て其道を盡せば、唯一邦を興こすに益有るのみならず、全世救濟の事業に於ても、亦其功勘なしとせざらむ、

靜里の後言

頃者、友人某の爲に、右大意を一讀せり、某予に示すに、福澤翁の新女大學を以てす、且つ云く、子能く之を視よ、それ或は偕に行くべき者あらむと、夫れ諸國に各々其先知預言者あり、翁の如きは、蓋し亦我か邦の先知者耶、今や造化の跡日に益々闢け、天地の更新も、不遠に望むべし、福翁の男女

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

一切萬事對等の言の若きは、此の勢を看破せし者にて、天下の明知と雖とも、亦此を越て見る能はざらむ、但、其書專ら我か邦今日の當用を主とす、故に邦域の事情に詳にして、未た宇宙の至道に及はず、予は即ち、道自りして、事に入り、天よりして、情に及ひ、根を窮て、而して幹に至り、源に遡て、而して後ち流に達す、一に女性本然の自由の滿ち且つ貫くを欲するなり、則ち吾か言或は迂遠に似たる者あるか如くならんも、沈潜反覆して之を思へば、必しも然るに非ざるべし、夫れ道を以て無レ本と爲せば、則ち無のみ、而して、其無や反て恐るべし、如し、天を以て無となせば、其有る者は唯た我意のみ、譬へば、脱兎の犬狼に困めらるゝが如く、自造の自由に因て、天網に罹る者も、亦輩出せむ、如し然らは、其悔吝も亦大ならずや、夫れ人には、性有り、情有り、心有り、而して意氣有り、其間だに、父得て子に奪ふ能はざる者あり、君得て臣に奪ふ能はざる者あり、即ち天公と雖とも、亦其時に先だちて之を救援する能はざる者あり、尋ねよ、爾ち之に遇はむ、求めよ、爾ち之を得べしと、尋ねざれば遇ふべからず、求めざれば得可からず、其尋ぬる所何に物ぞ、其求むる所何に事ぞ、此れ乃ち天下を愛ひ、後世を慮る者の尤も深く思を致さゞる可らざる所以なり、抑も、女子の道、其蘊奥の處は、女子獨り之を知る、故に其の言を擇び、敎に從ふも、亦獨り其心に在り、男子は、彼に友のふて、之を親敬するのみ、今ま、姑く、一二智仁者の數言を左に掲けて、以て靜かに女子の本心に問ふ

舊書に云く、男生に七段の開進あり、女生にも亦七段あり、男と途を別にして、而して唯一の道に相ひ進む、初め一に曰く、幼稚の時、其胸裏の眞中に、神理の微種を蘊蓄す、即ち後來、婚嫁の知識の本と爲る者なり、其微種の感發するに及てや、一開清淨にして、小苑を其胸裏に爲す、數品の花木、天公の自ら植ゑし所の者有り、而して幼女之を知らざるなり次き二に曰く、稍々長ず、而して處女の如し、未だ其淸妙なる小苑、將に開けて新界を爲さんとする者其衷に存するを覺らず、此の時に當てや、始めて女訓を學び、內務を習ふ、又た眞神言の其日夜の思想と爲るべき者を受く、科學に入ること稀れなり、蓋し科學は、外部の知識に屬す、內部の生活に屬せず、女子の心は、至誠の善と、其功用とを愛す、其誠の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

精神に樂みて、而してその知を蹈むを喜ぶ、次き三に曰く、玆に於て女は呼ばれて、愛と爲る、始めて其婚媾に屬するの聖事を覺る、此より以往、その單生、進みて完生と爲る、其夫との感情に成熟して、眞知に相ひ長ず、終に其夫と一心一體と爲り、而して永く其職務を偕にす、次四以下闕文、

一老行人あり、云く、或人頃ろ女性の卑しきを大議す、其形體弱く、其權力寡なきが故に、必す男に附屬すべしと、云云夫れ女性は、男よりも內にして深し、男は、女に因て而後己れの高崇柔順にして有成の德を見る、女子の品格は、男子と異なり、粗恢にして外部に主たることなし、靜々として、言ふ可らず、敵す可らざるの至尙なる者、其熱性の德に存す、凡そ今の國王權臣は女軍を作りて男隊に易ふるなど云ふ思想を大笑す、然れども、凡百の王公諸臣、陸續として女軍の前に伏降す、其感動に壓せられて、其引力に拜答す、蓋し此れ其陰覆微妙の火性より發する者にして、常に大に男に災いするもの、其中に有り、又其自ら傷ふものも、亦此れに因る女は、男中の感覺機關に應じて、其感ずる所、甚た盛んなり天地の感應、何に更に大なるものあるや、此れは乃ち女の權

たり、苟も、眞神の精靈氣息をして、秘密權の如くに、女子の中に入らしめ、而して女子、上帝の爲めに能く社會勤務の際に警醒自持すれば、即ち其高尙不朽の實權も亦確立せむ、彼れ神の右に立ちて、其皇后の如くならむ、其夫との心、安然として其中に依る、而して子孫之を稱して萬福と云ふ、若し夫の、完一の兩半男半、女半、其孰つれか先ならんと、相ひ競爭する者は、常に過つ、一半の完全は、私己に在ず、而して常に他己に在り、如今の世、女は只たその己れに從ふを求む、是を以て、欺かれ、僞方に運動して、悔吝に陷溺すと、男子と雖も亦然り、兩半、宜く相愛相敬すべし。

佳美人を論じて
某君に復する書

善寬の子　有　美

（附）章氏戀愛之原理及佳美人の所在

某盟兄座右

兄が某の月某しの日に於て惠まれたる一箋は、蓋し生が手にせる近來の快文字なり。今試に之を左に載錄せんか。

病に臥すること連旬、團子の味は僕の關せざるところな

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

りと雖ども、花を見ること能はず酒を飮むこと能はず、足下と語ること能はず、不平何ぞ堪えん。されど、一の倘ほ喜ぶべきことと「ほとゝぎす」といふ雜誌に之れ有り。下司病を得たり之を胃弱といふ、才子病を得たり之を肺病といふと。即ち僕は下司の域を一躍して才子の域に入りつゝあるものなり。才子は佳人に伴はざるべからず。是れを某に謀れば曰く、僕の知るところは醜の醜たるもの、君の意にかなふ能はず、宜しく有美君に托すべしと。足下それ僕のために絶世の名姝を紹介するの勞を取るや否や。謹んで足下の健全を祝す。再拜。

と。兄よ、兄は今時の御用商賈により俄身代になり上りし俄紳士の、急に妾騒ぎに立ち騷ぐが如く、「ほとゝぎす」の宣告により俄才子に成り上りしの故に、急ぎ佳人の穿鑿に取りかゝらんとあせらるゝが如し。されど、悲哉佳人は才子と好逑ある男子とに添ふべきものならずして、痴漢醜夫に附隨すべきものたるを如何にせんや。それ血族緣內相互の婚姻の、羸弱の子女を出すに至るは、能く人の知ところなり。蓋し體質性情の相似たるもの、互に緣を取り結びたるに之れ因らんか。

是に於てか兄よ、世には動かすべからざる一大原理あるを知るべし。曰く、體質性情相似たる男女にして相結ばゞ、子女の弱くして醜く愚なるを生み、相異るものにして相結ばゞ、之に反して強く優れたるを生むと。是に於てか、人間をしてこの玄妙なる原理に服從せしめんためにか、天に不思議の配劑あり、怪しき攝理を此土に下して、美しきは醜きを戀ひ、瘦たるは肥滿せるを、多血質なるは膽汁質なるを、丈け高きは丈け低きを、賢きは愚なるを慕ひ求むるの心起さしめ、しかも其契合によりて、智敏強壯優麗の子女あるを得せしむるなり。君知ずや、かのヴェニスはレモンの香ひ豐かなるほとりに女となれる優しきデスデモナは、雄武強猛の黑漢オセロを戀ひ、唐の名妓紅弗は、李衞公の英雄を慕ひしを。これぞ例のひねくれたるショウペンハウエルが唱へたらんところを祖述するものなれども、世間幾多の事實は、明に其の僞なきを示すに非ずや。世にはこの醜男にして彼の妻女の優麗佳美なるを怪むものあれども、駿馬の痴漢を乘せて走るは、是れ當に人類の自然法に基く本性たるなり。故に、兄にして飽くまで才子の資格ありと威張らば、到底佳人を得るの資格なきものなり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

是れ蓋し人類の均一調和を計り、其善美をなさんがためならんか。

若し『ショウペンハウエル氏原理』にして行はるゝことなく、美はしきは美はしきを慕ひ、才子は佳人に配し、しかも益々强健にして優麗智敏なる子女を生み、醜きは醜きに配して、愈々醜劣なる子女を擧るが如きことあらんか、美はしきものと醜きものとは、玆に著しき懸隔を生ずべく、多血質と多血質と、膽汁質と膽汁質と、大男と大女と、肥えたると肥えたると、瘦せたると瘦せたるとも、又同じく相結んで相懸隔せる子孫を生じ、人類界は美男子や醜男や、佳美人や醜婦や、大人國の住民や小人島の民や、氣違ひじめるまで躁狂上氣の人や、大理石の如く冷酷頑固の人や、その細きこと針の如き人や、其太きこと角力取の如き人や、兩々參々、互に相軋轢し相反目し相嫉妬し、玆に分裂朋黨を生じ、混亂攪拌を生み、上等夫婦と下等夫婦の階段あるに至るべし。此の如きは誠に夫婦撲滅黨の源をなし、人類の種屬を絕つ所以ならずや。之れを憂ふべしとなす。故に、この天與の攝理法則に殉じ、美はしくして醜きを要れるものには、强壯智敏優麗の良子女を與ふれども、これに反き美しくして美しきを求め嫁く如き、天與の鐵則を亂す者には、皇天上帝その私心を賤しみ罸して、此る夫婦を鞭ち、其子女をして羸弱痴愚醜劣の者たらしむるなり。かの好貌ある男子と所謂絕世の佳美人とが互に相配して生めるものの、不思議にも却て秀麗ならざるものあるは、則ちこの故なり。是に於てか以爲らく、兄にして若し飽まで才子の資格ありと威張らば、到底一佳人を得るの資格なきものなりと。然るに、世間の動もすれば、才子と佳人と並べ稱する所因のものは、この二者の相添ふこと實際の間此の如く夫れ稀れなるに觀じて、人々その抱くところの理想を述べ、之を劇に配合し詩に歌ひ言語に上ぼするに過ぎざるのみ。兄もし世に『才子佳人』の熟語あるを觀て、才子は必ず佳人に添ふべきものなりと早や呑み込みせば、是れ大なる謬りなり。猶ほ硝子玉を見て糖製の薄荷玉なりとして飲み込めるが如し。兄よ、もし誠に佳美人を得んとするの心あらば、謹んで『才子』の尊號を「ほとゝぎす」雜誌に返上し、昔の馬鹿者素の「かはりもの」に還るべし。佳美人は痴漢に添ふべきものなるを、馬鹿者に添ふべきものなるを、變りも

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

のに添ふべきものなるを。

夫れ紙幣が金屬に非ずとの前提ありとて、また必ずしも寶玉たりとの結論に達し得ざるは、論理學の教ふる所なり。因りて思ふに、兄、下司に非ずとて、必ずしも才子たりとの結論を得ること難し。生を以て觀れば、兄の肺病に罹れるは、まことに兄が才子たるの故に非ずして、兄の自ら白狀する如く團子を食はざるがためなり、たゞ花を見酒をのみ飲むがためなり。生の如きは墨堤に花を賞しながら、ラム・ホールに入りて濃き酒に舌うちすれども、又言問に休んで團子をも食らひ、新橋停車場のビーヤ・ホールに入りては泡立つ杯を傾くれども又風月堂のワツフルとビスケツトをも食らふなり。故に無病にして此くの如く息災なり。兄よ、少しく生と共に團子を頬張り、ビスケツトとワツフルとを嚙るの術學ばずや。されど生は斷言す。團子を頬ばりビスケツトとワツフルとを嚙るものは、遂にまことの詩人たる能はずと。生の「悪魔の子」と稱しながら悪魔の子たる能はず、しかも素より天の使たること能はず、なほこの塵の世に役なき未練執着を殘して半仙半俗の間にあり、浅ましくも「悪魔の子」と名乗り變へて、未だ全く人臭き域を脱する能はざるを示す所以のものは、此くの如くにして右と左とを利かするがためなり。兄よ無病たらんと欲せば團子を食ふべし。されど、罪なき杯に憂き身を窶して、一巻の活ける詩冊を作る、又大佳ならずや。

兄は生によりて絶世の名姝を得んといふ。されど、こは徒らなる空望ならんか。此の頃ミナルヴァと稱ぶ君より贈られたるリツトン、が作てふ「ルシール」を讀むうちに、面白き一ト節あり。

人をして最も感佩せしめ得る如き思想とは
之れを言語に發せんとする前
早く既に消え失するが如き思想なり。
最も能く吾人の眼を悦ばしめ得る如き佳美人とは
群集の間に於て僅に吾人の眼に觸れ
又忽ちにして見失はるゝ女人なり。
（リツトン作「ルシール」第一部 第五齣第一節）

と。蓋し穿てるの妙觀ならずや。兄よ、兄のこゝろ若し風に動さるゝ葦を觀んとするにあらば、乞ふ出でゝ野に行け。美はしき衣を着たるものは、王の宮にあり。されど、まことの名

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

姝まことの佳美人とは、此くの如くにして此處にあり彼處にありといひ得べきものに非ず、大恩教主の紫の雲に乘りて末世に現はれ給ふが如く、或は盜人の夜卒然として來るが如くにして來り、群集繁雜の間に於て、僅に吾人の眼に觸れ、又忽ちにして見失はるゝものなり。故に生が兄に紹介し得る所のものの如きは、素より醜の醜なるものなりと知れ。しかも尙ほ兄の要するところのもの、佳人名姝にありと言はゞ、生は則ち之れを知らず。乞ふ再び去りて淺草の奥山か、木挽町の歌舞伎座か、新橋の停車場か、銀座の街頭か、或は大阪天滿の眞中か、人込み多き群集の間に行け。是處に絕世の佳美人あり絕世の名姝あり。是れリットンの言なるを。拜復

醜業婦問題

山形東根

婦人社會問題の一として、民間の志士が疾くより唱導し來りしは廢娼の一事なり。昨年來、關東諸國に於て遊廓設置の企圖ありしかば、一時立消えの姿を呈したるもの俄かに唱起して又々世人の耳目を惹くに至り、遂に有志者の廢娼同盟會となり、昨今夫々の運動を試みつゝあり、洵に慶すべき現象と云ふべし。而して其筋に於ても近時に至り、種々の注意を爲すに至れり。

第一に見るべきは、年齡十八歲以上に至らざれば、自今娼妓たることを禁するの訓令なり。

第二に見るべきは、一夜に二人以上の客に聘せらるゝことを禁するといふ警視廳の注意なり。

第三に見るべきは、行政執行法の實施なり。

右より來る結果奈何は、風俗上最も注意すべきことにして、余輩は一應之を論議するの要あるを信ず。

(一)娼妓年齡の制限＝＝吾人をして眞個の希望を吐かしむれば全然廢娼の擧に出づべく、年齡制限の如き小刀細工の効果少なきを認むと雖、今日突然此擧にも出て難しとすれば、之を減少する方策の如き、せめてもの慰みとせざるを得ざるべし。此年齡制限は思ふに公娼を減じて私娼を多くすべしとは、何人も容易に知り得る所先づ十八歲に至るまで之を待つは貧家の堪へざる所なるべし(一)十八歲に至れば女子の思想既に定まる所あれば假令貧家と雖も醜業によりて父母を養はんと欲

せず、工女又は内職賃仕事等に奮勵して幾分を保助するの勝れるを感せん(二)下民は婚嫁の期早きを常とす、十八歳に至れば婚嫁を急ぐが故に、之より二十歳以上に至るまで浮川竹に身を沈めんとはせざるべし(三)要するに十八歳以上といふ制限は多少の影響なしとは云ふべからず。唯之によりて密賣者を增加すべしとの掛念あり。而かも之には行政執行法の實施あるなり。

(二)娼妓の兼客制限＝兼客制限とは二人以上に聘せらるゝを禁ずるなり。其筋の意見にては之によりて身躰を保護し幾分の餘暇を得て裁縫其他の日常の技藝を心得、他日人の妻女となりて差支なきに至らしむる者なりといふ、一應親切なる干渉なるが如し。余が先年取調べたる所によれば、東京に於て娼妓一人に對する平均一ヶ年の遊客數は次の如かりき、

新吉原	四九一	千住	三九八
洲崎	四三六	板橋	四七七
品川	五七九	平均	四九二
新宿	五九八		

是等の數は年々多少の異動あれば、直ちに斷定し難きも大躰例年此の如しと見て大差あらさる也。されば一年を平均すれば、最多數なる新宿の五百九十八人も一夜二人には當らざるか如しと雖も、之れ平均の數なるを記せざるべからず、假令は一月一日二日三日の間は、例年吉原のみにて十万餘人の遊客あり、又酉の市の如き、櫻の時節の如き、七月盆燈籠の揭ぐる時の如き、非常の雜沓を來すを常とす、試みに、去る五月十日御慶事の當日、下等社會は奈何なる劣情を弄したるかを見よ。十日の夜吉原に遊びたる遊客數は左の如しと。

	遊客數	娼妓數	娼妓一人に付客約數
角海老	百七十八人	二十人	八・一八
稻本樓	百四十六人	二十一人	七・
中米樓	二百三十六人	三十六人	六・二
大文字	百四十人	十六人	九・
萬華	九十一人	十三人	七・
稻辨	百四十七人	三十人	五・
新稻辨	百十一人	二十七人	四・三
辰稻辨	百二十五人	二十五人	五・
相泉	三十八人	十三人	三・
相万	百十一人	二十七人	四・三
新福岡	八十四人	二十一人	四・
松金	八十三人	三十三人	三・
野村	四十五人	十三人	三・六
松山	四十五人	二十一人	二・三
河内	三百五十人	三十二人	一一・
實來	百十六人	十七人	七・

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

之によれば僅か十六軒にて、娼妓數は三百六十五人、之に對する遊客は二千〇四十六人にて、一人に付平均五人以上なり若し一月の三ヶ日の十万餘人に想ひ至れば蓋し平均十人以上に當る、慘酷とは實に此の如き事を指すべし。

されば此に注意すべきは、常日と臨時の別なり、一年を平均すれば、一夜二人に當らずと雖も、臨時の場合に於ては十人にも當るなり、妓樓に於ては此臨時を平均して計算するとなれども、若し斷然奈何なる日たるを問はず、二人以上の兼客を許さずとすれば、

第一、妓樓主人は困難を感ずべし、

第二、娼妓の借金の返却期永くなるべし。

此第一の結果は論するの要なきも、第二の借金返却期の延引は奈何。之に就ては種々の問題に遭遇すべし。余惟へらく、

(い)借金返却は、玉代を以て充つるものなり、客少なければ、借金を返却すること甚だ困難にして、身を沈めたる時期をして永からしむるが如し。

(ろ)而かも娼妓は稼高を以て借金を皆濟し、喜んで郷家に歸る如きは殆んどなし、大概落籍を待つものなり、故に兼客を禁すれば、一層親切となるべし、玉代は高價となるべし收入の少なきものは遊ふこと能はさるに至るべし。

(は)既に此結果あれば、密賣を增加するに至るは必せり。

されど、兼客を制限するは、公娼をして多少共減せしむるに至るものあるが如し。且つは月々書生の吉原に遊ぶもの三千餘人に至るといふも畢竟遊蕩費の安きが爲めなればなり。さらば密賣は如何にすべきか以上二つの政策は必ず密賣を增加するは見易きことなれば、次の問題に移らさるを得ず。

(三)**行政執行法**=去る二日發布せられ、去る二十日より實施となる該法中、特に注目すべきは左の條々なり。

第二條　當該行政官廳は日出前、日沒後に於ては生命身躰又は財產に對し危害切迫せりと認むるとき又は博奕、密賣淫の現行ありと認むるときに非ざれば現居住者の意に反して邸宅に入ることを得ず、但し旅店、割烹店其他夜間と雖も衆人の出入する場所に於て公開時間内は此限に非ず

第三條　當該行政官廳は密賣淫の罪を犯したるものに對し其健康を診斷し必要と認むる時は本人若は媒介者の費用を以て病院に入らしむることを得……………………

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

風俗上の取締を要する業を爲すもの、居住其他の制限は命令を以て之を定む

夫れ已に娼妓に關して二條件を附したれば、當然密賣の增加を豫想せさるを得ず、而して今此法を實施せば奈何の結果ありや、存娼論者は之れ却て風紀を亂すの基ならん私通を增加し、密賣を增加す、警察の力と雖も、其內秘の事は及ぶべからずとす余輩亦之を知らさるに非ずと雖も、此の如き理は、社會の改良、社會の制裁、及人情の進步を蔑視するものにして取るに足らざるなり、一利一害は事物の常なり、其最も宜きに從ふを可とす。夫れ密賣者に對して行政執行法を實施すれば、左の如き結果あり。

一、密賣者の恐るべき梅毒蔓延を防ぐに功あり。之れ從來毫も行はれさりし所なり、尤も梅毒を恐れて近かざりしものが安心して近くが如きものも多少あるべし、

二、密賣者已に斯の如くなれば、其害娼妓同樣なりと雖も彼れ公然許可せるものに非ず、且違警罪として拘留せらるゝが故に公娼に於ける如く氣樂にして遊ぶヿ能はず

三、已に公許せされは社會の制裁嚴なり、從て之に遊ぶものの多からざらん。

唯玆に注意すべきは、內秘に行はるゝ淫猥行爲の增加奈何といふヿなり、こは時に免れざる現象なりと雖も、漸次種々の政策を用ゐるの外あらざるべし。兎に角、以上三種の法は吾人の贊成する所にして、唯人權を害せざる樣、注意を要するのみ。

最後に於て余輩の倘當局者に希望せんとする一事あり、何ぞや、

一、娼妓は滿三年間の外は、其業に從ふヿ能はず、換言すれば三年以上娼妓となるヿを禁するヿとすべし。

一、密賣淫は其婦人を拘留するのみならず、男子をも拘留するヿゝ。已に賣者を以て違警罪とせば買者も亦違警罪と認めて可なり、恰も竊盜を咎むると同時に、竊盜品と知りて之を故買するものを罰するに異ならさるべし。買者あるが故に賣者も存するなり、一を罰して他を許すは道に非ず、

一、密賣に關係せる男子を抑えたる節は、必ず、父兄又は妻子等を召喚して其面前に於て說論を加ふるヿとすべし。

右三ヶ條の法を設けば好結果を呈すべし。吾人は平素、自治

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

を重んじ、法律の干渉近時餘りに多大に過ぐるを嘆ずるものなりと雖も、已に前述の如き法を布ける以上は、余輩が希望する所を容るゝは當然なるべしと信ずるなり。

西宮夜靜百花香　欲レ捲ニ珠簾一春恨長
斜抱雲知深見レ月　朧々樹色隱ニ昭陽一

戀

江見水蔭著
博文館出版

こは水蔭子が短篇を寄せ集めたるものにて、『海賊の戀』の、『獵師の戀』の、『鑛夫の戀』のと、色々くさ〴〵の戀あれども、まことや海賊の戀にもあらず、獵師の戀にもあらず、鑛夫の戀にもあらず、彼の遠きオリムパスの嶺にてジウスの神がセナの女神を生み出せしてふ如く、詩人が其頭のうちより生み出せし『幻』と名くる子供等の戀なり。かゝる鑛夫や獵師や海賊やは、エーテルの波清きところには住ひ居らんめれど、この塵の世には見出さるべしとも思はれじ。然し、仁義道德を重んじ給ふ今の君子方や、島原の太夫ならざるに、足八文字に履み歩るき給ふ矯風會連などよりは、『清潔だ』の、『健全だ』の、『ヘルシーだ』のと賞讃を受けられて、或はミッション女學校わたりの教科書たるの榮を得らるゝやも計られじ。我れは甚だ時少なきものにて、失禮ながら水蔭子の作を拜せしは、これと廿歳前に讀める『今辨慶』との二つのみなり。雀は小躍り百までとか。『戀』の作者なる水蔭子の血管には、今なほ『今辨慶』時代の血しほ流れ居るものと見えたり。我れの水蔭子の作を讀んで思ふは、その甚だローマンスの躰ありて傳奇的の傾あることなり。この點に於て水蔭子は稍々米のホーソルンに似たりといふべきか。故に以爲らく、江見水蔭君は、夫れ日本のホーソルンなるかと。其傳奇たることの何ぞしかく相似たるや。(有美妄批多罪)

家庭

田舎の嫁御

黒老女史

赤き手柄掛けておちよぼ口する花嫁を見れば誰しも何となく一種の同情と可憐の心きざすものなるを、さりとは鬼千匹の親御姑君の御憎しみは又一しほぞかし心ある人少しは嫁御の身にもなりて見給へ御互ひ欲と云ふものを目的に夫ならば貰ひませう遣ませうと本人は扨て置いて親と親との談判調へば即ち鬼が住むてふ恐ろしき所に無理往生に娘を逐ひやり、女房は唯子を拵へ鍋墨を搔き落す道具とのみ心得て居る男と初めて遇ひいやな〳〵三々九度はまだしものこと綿帽子をはぎ取られて穴のあく程顏を見らるゝ迄はよけれど愈々送り來ゝし身内の者共嫁を殘して歸宅らるゝ時の悲しさ辛さ云はん方なし之よりが誠の獨りぼッちと不吉乍らも淚は振袖の雨の袂も絞る計り白粉とれて睫腫れ上り氣まり悪ければ小闇き隅に身を寄せて猶ほもしく〳〵と忍び泣き

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

する時村の若衆醉に乗じて年寄さへも顏を赤らむ安房口をきゝつゝ恥しさに身を固くする嫁御を抱く樣にして聟殿の待ち玉ふ暗き室に押し遣らる

翌朝は誰よりも早く目覺めたれど身慄ひするほど譯もなく怖ろしく恥しく大日樣此身を何と思召さるかと先づ恐れ入て顏は上らずとかくは沈み勝ちなるを早や近所の女共ドヤ／＼と押寄せて手傳ひを名に實はさん／＼腹のくちくなる程御馳走に預度き下心、花嫁を取捲いて褒めるやら乘せるやら帶を引張つて見るやら裾をまくり上げて見るやらぶしつけながら櫛の價格を問ふもあり頭の上より爪先き迄で一ヶ所も洩らさず心の内に批評を下し扨き他日茶飲會議の議案を提出するの準備に急はしく勝手に灰神樂の上りしに心附かず、夫より七十五日の間は式の如く嫁御の器量如何と仕度の善惡御飯を幾杯食べて便所に幾遍立ちし事迄で噂さにわげられ夫れもそろ／＼ほとぼりの冷める時こそ最早内の靑鬼赤鬼才先き揃へて角を振り牙を鳴らす頃ぞかしあゝ恐ろしとも怖ろしきは此世の活ける鬼にぞありける、女な殊に花嫁は凡て扣目におとなしく出過ぎざるをよしとすれば物馴れざる儘にポンヤリして

三〇

居る場合あり姑君茲ぞと兼て狙ひを定め居たる的に一本差込み、姑などが手を出さずとも能き時に態ざとせわしげに襷などかけて嫁の鼻先きにてせつ／＼と立働く事あり嫁驚きて私が致しますと云へば側らより小鬼出來りてイーエ御手が汚れますから私が致しますと否應なしに引つたくり行るゝ時の嫁の悲しさ！眞綿で首をしめらるゝとはげにかゝる事ならむかし又花嫁間もなく妊身すれば姑にとりては早や過ぎるとて墜胎罪を教唆するものあり妊身せざればせないとて後嗣がなくては困ると小言をのたまふ又小姑が菓子を盗み食ひしたる時にも寃罪はいつも嫁樣の頂戴する好物さても／＼調法なるは嫁なる哉

如何なれば昔より嫁姑の間柄内滑ならざる之れげに一種の奇蹟ぞかし他家の嫁に隨分淚を流して同情を寄せらるゝ姑君も如何なれば我家の嫁を悄み罵るらむ嫁と定まらぬ内はおかしきまで可愛がりて可愛がりたる結果愛兒の嫁にと貰ひたるなどの場合に昔と打つて變つての邪慳に嫁を泣かしむる例往々有之り實に不可思議の至りならずや朝起れば何か過失を見出してやらむかと姑はうの目鷹の目キヨロ／＼今朝は又如

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

何なる顔して睨めらるゝか御機嫌能うてあれと先づ床の内より心配する嫁とは恰も一家に犬と猿を飼ひ置くに均し。女の古きを姑といへば只此一言にて其意義明かなれど猶ほ詳しく分析すれば姑は氣の毒ながらあらゆる厭ふべき文字を使用せざるべからざるを如何せん嫉妬僞善殘酷の三元素之即ち姑なるを(大別すれば)一體嫁といふものを誰の所有と思ひ誤てるやらむ我が愛兒の嫁ならずして所謂姑舅の嫁たるの觀あらざるなきか若夫婦差向ひに睦しく物語するを立聞して何となく妬く憎くなりチーお父さん今の若い者は何といふづう〳〵しいでせうと影口をまた夫にそれはかうだろうと少し反對の意味を含みたる時は女らしくない強情と誹らる何につけても何となく嫁のする事成す事物いふ音聲素振まで一々氣に食はず不快に妬ましくくやしく憎らしく何ぞの時には嫁一身に其欝々たる不平不滿をはらさんため嫁をいぢめて當り散らす也、子などまうくれば夫がため家内の風波を靜むる如く我も人も思ひなせどそは只皮想のみ外見のみ却而眞の悲痛は子をまうけて後にこそ幾倍する者なれ孫か可愛い〳〵で何事をも子の云ふ儘にしてやれば何となく世間の聞え宜しけれど實は内心にて只嫁をこま使ふ間丈泣かせずに小守さへすれば年寄の役目は濟むものと心得飲食物を撰らばずむやみに與へて其結果胃腸をいためさせあげくのはては嫁が食ひ辛抱で悪い食物をたべるから乳が悪くて子がお腹を病むと能きいひ草なり夫で自分は今日は一度も泣かせなかつたと子の泣かざるを何よりのプライドに數へ立つる笑止さ、子を遊ばして居れば怠るかの如く思はれさりとて姑に任かしておけば鳥でさへ我子は可愛がる者といふたま〳〵子の我儘を叱ればこんな恐ろしい親はないと御慈愛らしく子の前にてさん〳〵嫁をいびり悪物といはぬ計りに罵るかと思へば子が嫁の乳房を摑みつゝあとけなく戯るゝを何と思ひてかおばあさんの許にお出で御菓子をやるよと無理に子を引張り出し而して嫁の見ぬ蔭では隨分可愛想な程泣かして居ることもあるなり斯く何時何を爲すも意地悪く憎々しく仕向らるゝ嫁御寮の心中誰か憐れと思召さずや之れ空想にあらす妄像にあらず小説にあらず否な現に目前に於て演じつゝある活ける小説なりトラヂーなるを如何せん世には仁人あり慈善に矯風に全力を捧げつゝありとかされど誰か此憫然なる而も悲痛慘憺たる境遇より嫁御を救はん

とせしぞ否な嫁てふ問題さへも餘り論ずるを聞かざりし蓋し我眼界狹隘不幸にして見逃したるやも不知はた又世人姑舅の御機嫌を損ぜんとを恐れて默過したるか。思ふに女子の教育は家庭にあらず學校にあらず實に姑が住む鬼界ケ島といふも敢えて過言とも覺えず一度此教場に無邪氣可憐の花嫁を投じて見よ漸々姑の感化を受け不知不識の間に宛然第二の姑と成り變るとかく姑に鞭たれて山に三年川に三年里に三年の難行苦行を積み初めて昔のいぢらしく涙脆き花嫁に鱗生し妙に意地惡く人の悲しみを見て冷笑し知て居ても知らぬ風を裝ひ心に陰日向生じ物事を隱さずに濟む事も隱す癖がつき（さなきだに女はかくしたがるものを）横着を使ひ嫉み、人の影口をきゝ、世辭を云ひ實に醜穢見るに堪えぬ所謂純然たる嫁根生を形造るなり豈怖れて惧れざるべけむや、

然るに姑舅にいぢめらるゝさへ確かに十年の生命は縮まる者を況して城とも栖とも力に頼む夫にして外にありて暴飮好色他の娘を穢し人の妻を盜む等の放蕩無頼を極め内妻子を省ざらば此内憂外患に狹き女心の自殺を謀り發狂もし兼まじきは當前のみ、少しにても心よからぬ顔すれば男の放蕩は有勝

の事それを女房がッべこべ世話やくものでなしと妙に人事の樣に當擦らるゝは必然なればせうことなしに空閨にもぐり込み愛子を抱きしめて枕も浮く計り泣き盡し泣き明かし翌日子に添乳しながらいねむりした事までヂロリとにらまるゝなりせめては此苦痛を聊かにても生みの親に洩らさんとすれば兩親口を突らせ膝を押し寄せて先方の不道理を非難しさらば彼處斗りに御日樣の照るでもなし早速歸れとあらう事かない事か子まである仲を生木を割く如く離縁せよといふ先きには娘の應せざるを無理に非を理に枉げて嫁付かせ今は事もなげに易々と離縁をすゝむ何ぞ愚昧の甚しき之れ娘の堪ふる所なるや否や世の嫁御は大概ね此舅姑難に依りて實に熱湯を呑むより猶ほ辛き所謂死度くて死なれぬ境涯に瞑目するまで苦吟せざるを得ざるなり

あゝ世人此をしも名けて御芽出度といふか酷といふか將た又何と謂はむ

花に遊ぶ虻な喰ひそ友雀

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

隨感

○「智育に偏す」と言ふものの誤謬

智育に偏すなど論げつらふ人の、先づ省りみて思ふべきヿあり。其の所云ゆる智育とは何ものぞや。大凡そ論議を事として空しく是非を語らんとする輩は暫らく置き、實地に『人』を教えて其の人格を妙に開發せんとするものに取りては、豈に本來、教育に智育德育躰育の別あらんや。假りに其門を分ち其の入る所を異にせしむるとも、徹して心地に達き、活きて生命に同化せしめんヿを主とする教育の本躰そのものに於ては、之を奈何んぞ智に偏すと云ひ德に偏すと云ふヿのあり得べきものならんや。其の偏すと云ふ所ろのものは乃わち全躰の足らざる也、欠けたる也、單だ偏よりたりとのみ言ふべからざるべし。故に惟ふ、今もし實際に智育に偏するヿありとせば、其の過、教育者にあり。何を以て過と云ふ。其の教育者が先づ智育を視て德育と分別したる誤謬の觀念あれば也。左れば、もし彼等にして初めより智育德育を分別視するヿなかりせば、何んぞ其の一に偏すると云ふヿあらんや。偏するヿある能はざる也、たゞ備わらざるヿのあらんとする耳。

○智德不二

智德を合一なりとせる古の哲人の論辯は之を問はず、今の心理論者が盛んに此等の討論に日を消すを左したるヿとも思はず、吾人は實地の教育に於て此等の論議の殆んど無用に歸すべきヿを覺れり。試みに眞ヿに智に關しての精神的教育を施こせ、是れ實に德化にあらずや。又試みに德に關しての實際的教化を與えよ、此れ實に智育に非ずや。茲に其一を施して他に連係せしめざるヿを得んや、二者必竟同一の生命のみ。

○文政一新豈至難ならんや

文政の擧らざる久し、其の擧らざるヿを論ずるものも亦久しい哉、而も遂に明論なき所以のものは何んぞや。吾人竊かに惟ふ、皆な是れ末節に拘々たるが故のみと。凡そ文政を擧ぐる他あらんや、學に人を得るの一方あるのみ。人を得る豈に

必らずしも之を養成すとのみ言はんや、既に在る所ろのものを招き致すべきのみ。之を招く何如ん、厚く遇し重く任じて驥足を伸ばさしむるにあり、何んぞ必らず金銭名位の事と言わんや。人に師たる者は、人に僧たる者と同じ、貧困究乏によつて志を動かす者の如き何んぞ顧りみるに足らん。其の重任、厚遇せられず、所信行ひがたく、抱負伸ばしがたきをもつて最大の苦痛とする所のもの、即はち用いて人の師となすべき也。如此今や敎育者の不足を言ふ、其所云ゆる敎育者は一種の技師なり、是れ大いに養成せざる可らず、歎じて之を不足とする所以のものは不可なし。但だ夫れ敎育者以上の敎育者、即はち師道を以て任ずる所の高士その人に至つては、豈に容易に造るべけんや、但だ招き致すべきのみ。見よ、元老樞密の舊官、陸海軍豫備の將士、地方達徳の舊師其人等にして、小學の校長たらしむべきもの太はだ多し、當に優聘して之を校長とし、別に技師たるべき敎頭其人を師範學校出身の類に求むべき也。凡そ小學校長を重んずる既に斯の如く、其學校を以て彼の城郭とし、彼を一城の主とし、たとひ文相局長といへども其の俗吏たる身分に省りみて、極めて之を遇すべし。もし今の文政に任ずるもの、先づ此般大屈の謙德を抱き、聘して四方の達士を學界に致さば、學界振はざらんとするも得んや。如此くんば、畫一の學政は之を要せず、當に各人に任ずべし、煩瑣の學政は之を要せず、當に生ける人物に托すべし、斯して文政は至つて簡、而も至つて大。文相は至つて低く而も至つて偉なるを得ん。故に文政を振張する必らずしも錢を要せず、必らずしも議會の協贊を須たず。基闕にして之を一新する亦必らずしも難きにあらざる也。

○新井奥邃君

仙臺の人、新井奥邃君、明治三年に於て森有禮氏と同もに米國に渡り、當代の偉人ハリス翁に就きて道を學ぶ三十年、屢ば山林に隱れて靜養し、遂に自得する所ありとて先つ頃ろはじめて歸朝す。曰く單身魔軍と戰かふ、豈に必らずしも勝つと言はんや、但だ之に服せざることと、之に打死すべきことを知るのみと。近日、吾が村舍のほとりに來り寓して茅屋に來往し、仙骨超然、瓢々として風に御する如く、二三子と居を同もにして篤く敎ゆる所あらんとす。吾が村、一異釆を添え、太はだ雅致あり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

雜錄

論書絶句 幷引

巖本琴城

近世詩人、往々有本朝咏史及論詩諸篇、世已傳誦之、獨於論書作、未聞有及之者、予常憾焉、頃日閑居無事、偶出所藏本邦金石文字搨本、及眞蹟石版、可以爲臨池法則者、若干種、順次探韵、作五言絶句十五首、亦消閑之一適耳、敢謂補前賢闕典哉、

戊戌冬日　　琴城巖範識

其一

筆痕殊秀揚。楷法千年仰。僅々百餘言。佛光加萬丈。

南都法隆寺釋迦銅像推古帝三十一年所鑄造其光背記文一百九十五字筆勢遒媚使人爲飛騰步虛之想本朝金石文字是爲第一

其二

浼々横流上。殘碑留古香。如看六朝字。樸茂勝初唐。

宇治橋碑在橋東常光寺中斷截僅存四分一後長門人某集古法帖字補刻之銘曰浼々横流其疾如箭云々又曰世有釋子名曰道登大化二年丙午之歲搆立此橋適當唐太宗貞觀二十年

其三

八十有餘言。行々皆完璧。何同瘞鶴銘。殘闕苦湮蹟。

多胡分郡碑、在上毛國池村、……刻和銅四年分郡符文、字大三寸許楷法完好、聞淸國翁覃溪、葉東卿諸人、喜其類瘞鶴銘摹刻播世、

其四

玉案與銀鉤。當年彤管出。貞砥遺妙蹤。猶認温柔質。

佛足碑在南都藥師寺鐫楷書國風二十一章傳曰　孝謙帝宸翰翩々有神仙氣象皆罹火災損闕數句

其五

盤間走虬龍。斯道眞天啓。正反又縱横。掃除寫經體。

嵯峨帝機暇好弄筆翰海內風靡弘仁九年修太極殿其北門扁額實係帝宸筆云而今亡南都般若寺額尙可仰典型字大五寸許有穆々天子之氣象

其　六

十二傳書法。歷然五體新。後生猥摸擬。牛首接蛇身。

僧空海入唐、從韓方明、學書法、善五體世稱五筆和尙、其十二點書者、傳以爲學書階梯、

其　七

驚奔兼起伏。轉變逐行新。歷試如椽筆。幽冥感鬼神。

伊都內親王願文、傳曰、橘逸勢所書、眞跡今在御府、予嘗於博覽會得涉覽筆勢爽、動如快劍斫陣、

其　八

連綿斷復續。千丈游絲書。古今歌集眞。國字大成初。

紀貫之善假名字、按米庵墨談、载宋人吳說游絲書、呂東萊詩曰、靜寫游絲不停手、非烟非霧斷復聯、是也、

其　九

眞蹟末由看。古今稱妙技。只留鯨背書。奕々照西海。

藤原敏行書、高雄山梵鐘銘詞、世稱三絕書、近來邦人游淸國者、以三絕榻本爲土儀第一、

村上帝、問小野道風、古今妙書爲誰、道風對以敏行空海二人、而敏行眞蹟無傳于世者惜哉、

其　十

口碑不我欺。墨妙何奇崛。百拜發心門。十餘字皆佛。

小野道風書、浪華天王寺發心門扁額、曰釋迦如來、轉法輪所、當極樂土、東門中心、十六大字、予見眞蹟双鈎本、運腕精妙、非爽所及、

其十一

一幅直千金。彷彿右軍字。誰卷朶雲來。裁成長丈二。

藤原佐理書傳于世者多尺牘稱之候紙

唐太宗多收右軍尺牘每卷丈二尺故及

其十二

院體初成跡。淳風漸變遷。君家獨傳訣。奕葉盡翩々。

藤原行成子孫能繼其業不墜家聲者十五世以是傳習最廣世稱曰世尊寺派

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

海舟先生逸話

椴海舟余波
禁二轉載一

西郷サンの法會の時は、吉井、税所、松方、宮島などで、徹夜の話でした。伏見鳥羽の戰の時の大將は吉井さんでしたから、先づ吉井サンからの尋に、あの時の官軍は極僅かなとでしたが、ナぜあれが破れなかつたのです、如何にも幕軍は腰拔などでしたと言つた所が、勝サンの答に、官軍はたゞ一列でしたらふ、破るのに雜作はありませんが、破れた所が西京へ追込む丈です、軍艦は幕府にあるのですから、大阪から打込んだらどうですと言はれました。スルト、吉井さんが、其事です、大阪で色々評定がありまして、海江田、廣澤、品川其外はみな夫を心配しました、夫で近畿の藩々をかためてから、ゆる／＼江戸へ上らふと云ふ意見で、其比、海江田の言ふとは、中々行われたものですが、西郷サンひとり承知しない、その勝安房守があるから心配はない、ひとり攻め上ると言つて、大津迄で出かけたから、先生が行つたと言ふので、ワイ／＼あとから尾いて來て、夫が官軍となつたのだと言はれました。夫れで、ナぜ軍艦で勝サンが打込まなかつたと問はれましたら、打込んで西京へ追拂へば、天子を挾んで九州へ逃げる、スルト徳川は外債を募つて、やりくりをしても、五年より持たぬ、五年で倒れて澤山の外債を殘したら、松方サン、其時大藏をやれますか、少しも外債を殘さずに樂なのは、徳川のおかげだ、お禮を言ひなさいと言ふとで、松方サンは布團から下りて禮を言ひました。ソンナ時は、勝サンの勢は凛々たるもので、中々平生の冗談半分の樣子とは違つてました。ソレデ、お前方は、倒れる徳川を倒して、伯爵や子爵になつてるのは誰のお蔭だ、全たく家康と天海とのお蔭だと言ふお話しです。夫はどういふとでト、松方さんからのお尋ねでした。夫は、大阪落城の時、天海が家康に言ひますに、既に秀頼のもりとなつたる人が之を殺すと云ふは、全く天下の爲で、天下の爲に殺す可らざる人を殺すに至つた以上は、徳川も他日の用意をせねばならぬ、北條でも、其終りに多くの人を殺した、人を殺さぬやうにして、他日政を失なつた時に、權を移すやうにせねば成らぬ、夫には島津が八十万石、加賀が百万石としても、其の倒れる時には、士より町人に至る迄、守つて多く死ぬに違いないから、徳川の所領は全國に

分たうと言ふので、御承知の如く、大々ナ所でも、十万石以上はない、其外は所々に分けてありました。其の倒れる徳川を倒して、お前方は功を立てたのだと言ふお話しでした。(某氏談話)。

胸のひゞき二つ三つ四つ

米女

かよひくる風もしたしくなりにけり
　軒のわか葉のかげ茂りきて

はかなしと思ひしりてや咲く花の
　かすむあたりを渡るかりかね

ひとりすむ山の庵のさむしさを
　音つれてふる春の雨かな

あま小舟こきゆくかぢの音たえて
　影もおぼろにかすむ夜の月

おとつれぬ都の人をまつかげに
　三つ四つ二つとぶ螢かな

若竹のまき葉の露に宿りたる
　月の心を心して見よ

姫婦と歯	毎日新聞(七月六日)
白石大尉の先妻	富士新聞(六月卅日以後)
同大尉の母堂	報知新聞(六月廿七日)
日本婦人服装の特色と欠點	萬朝報(七月五日)
玩具と衛生	時事新報(六月十五日)
心頭語(女子の評。千八)	二六新報(六月下旬連載)
馬場美勢子談	時事新報(七月一日より)
巾幗婦人の外相罵倒談	日本(七月二日)
日本の庭園	讀賣新聞(六月連載)
服部中佐の未亡人	中央新聞(六、二十九)
北京公使館の少女	富士新聞(七、五)
外國婦人の観戦談	都新聞(七五)
夏の花束	讀賣新聞(六、廿三以下)
夫人の素顔(後藤伯未亡人貞子。加島屋浅子)	報知
化粧品のはなし	やまと新聞(六月連載)
上古の遊婦一斑	富士新聞(六、十四以後)
華族の家庭(子爵平松時厚、南部利克)	電光(六月十九日後連載)
山岡英子	千代田日報(六月連載)
秋田婦人學會の評	秋田日々新聞(六、九)
瀕死の女囚槇田のぶ	報知新聞(六、十三)
美人地理學	讀賣新聞(六、十三。六、廿二)
八束殿と須賀宮。婚姻の關係。	國民新聞(五。十)
男女同等。結縭。婚姻の沿革	時事新報(五。十)
黒田マサ	報知(六、廿三、廿四)
料理新味會合評	讀賣(六、四。六、五)
新女装粧	人民(六、五)
米國慈善家の迷惑(ガールド嬢)	報知(六、四)
女子と料理(岡部知丁)	讀賣(六、四。六、十二)
家庭の新風味	山梨民報(六、三)
俳優と婦人	萬朝報(五月連載)
料理生可通	やまと(五月連載)
才媛美談(四條馬子、孝子。寶司房子)	千代田(連載中)
貞実堂(女の評、清生)	二六(五月十日后)
岩崎みは子	報知新聞(五月連載)
海外に於る我姉妹の醜行	毎日新聞(五月連載)
藝者美と素人美との評	萬朝報(五月四日)
婦人の涙(三谷!、三井!)	二六(六、二十)
杉山彬氏未亡人	東京朝日(六、十六)京華(六、十七)
女學生の受業服	時事(六、十一)
宴會の食法(茶ばなしの一)	讀賣(六、十七)
當世髷百種	やまと(六、七)

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

◉經濟雜誌社編纂二大要書廣告

訂正増補 四版 **大日本人名辭書** 大本全一冊 定價金拾圓

但東京市外ハ別ニ十里以内十五錢、百里以内廿八錢、百里以外五十六錢、臺灣一圓十二錢ノ小包郵便料ヲ要ス

右大日本人名辭書今般刷成ニ付更ニ左記日本社會事彙ノ豫約出版ニ着手ス

訂正増補 再版 **日本社會事彙** 大本全二冊 定價金拾六圓

弊社夙ニ日本百科全書ヲ編成セントスルノ志アリ、然レ氏此事タルヤ一朝ニシテ成シ得ヘキニアラス、於是乎先ヅ泰西政事類典ヲ譯述シ、尋テ大日本人名辭書ヲ編輯シ終ニ日本社會事彙ヲ大成セリ、皆此目的ヲ達セントスルノ主意ニ出シナリ、爾來文物開進ノ日一日ニ盛ニシテ、大日本人名辭書ノ如キ、既ニ四回ノ出版ヲ經テ稍々遺憾ナキニ至レリ、而シテ日本社會事彙モ亦數年前ニ於テ傳誦シ、江湖ノ需要之ニ集リ、現ニ四十餘圓ノ價格ヲ以テ市間ニ賣買セラルヽコト日既ニ久シ、我社夙ニ之ガ増補改訂ニ着手シ、大ニ前版ニ漏レタル項ヲ増補シ、其稿今ヤ全ク成ルヲ告ク、依テ之ヲ再版セント欲ス、願クハ大方諸彦ノ賛助ヲ得テ其目的ヲ達スルヲ得ン、其要領左ノ如シ

第一 此書ハ國初ヨリ明治ノ今日マテ、政治、制度、法律、理財、商業、工藝、風俗等、百般ノ沿革ヲ統記シ、頭字ヲ五十音ニ分チ、索引ニ便ニシ、且圖畫ノ今日ニ存スルモノ、大約之ヲ挿入セリ
（見本御入用ノ方ハ郵券二錢ヲ投ゼラレヨ）

第二 此書六號活字三十六字詰、三十行、二段組、紙數大約三千頁、之ヲ二卷ニ分チ、背革金字入クロス表紙ニ製本シ、第一卷ヲ來ル明治卅四年二月中ニ發兌シ、第二卷ヲ六月中ニ發兌シテ完了スヘシ

第三 此書定價金拾六圓ニシテ豫約價左ノ如シ、

一 本月二十七日迄ニ一時入金ノモノ 金八圓

二 本月ヨリ明年三月迄毎月一圓宛入金ノモノ 金拾圓

但東京市外ハ別ニ送本料ヲ申受クベシ、其割合小包郵便料十里以内廿二錢、百里以内四十錢、百里以外八十錢、臺灣一圓六拾錢

第四 豫約期限ハ本月廿七日マテトス（但シ豫約御申込期限內ニ御申込アルモ期日迄ニ豫約金御拂込ナキハ御破約ト見做ス）

明治三十三年六月 東京京橋區彌左衛門町七番地 合名會社 **經濟雜誌社**（電話番號新橋八十七番）

青柳有美作

戀愛文學

近刊

（附錄）美術論數篇 裸躰畫其他美的寫眞版入

● 戀愛と婦人の眞相を知らんとする人は讀め

● 男に詐されたりと言ふ女は讀め

● 女に欺かれたりと思ふ男は讀め

● 戀に惱めるものも又讀め

● 此書は魔書なり不健全なり不道德也

● 此書は世を騒がさんとする青柳有美の處女作なり

發行所 **春陽堂**

在文科大學 海門著

三島通庸

通庸肖像、自筆の歌、大久保利通公書簡、外に銅版四枚、菊版洋裝美本、全一冊定價郵稅共八拾錢

○帝國文學評、筆端颯爽、よく通庸の眞面目を捕捉するに足れり、

○日本主義評、斯る新著の種々梁出して世弊を矯め、讀書社會を裨益する所あらん事を望む、

○運動界評、行文流麗にして又悲壯、三嘆して卷を措かざるものあり、

○經濟雜誌評、福島事件、保安條例實施等の內情に於て、世間に知られざる者を記載せる者多し、頗る趣味ある書なり、

發行所 東京牛込區市ヶ谷砂土原町一丁目一番地 **洗心書院**

取次所 東京市小石川區大塚坂下町 **密嚴教報社**

先師松本荻江建碑之勸募狀

嗚呼哀むらくは吾師松本荻江 明治三十二年九月十五日を以て逝けり 師は往年職を東京女子師範學校及秋田師範學校に奉じて 女子教育の任に當り几帷を都門に下し 或は神戸の女子神學校に在りて 子女薫陶の事に從ひ 晩節に及ては尤力を大日本教育會帝國婦人協會等の事業に致せり 故に師の一生は教育事業を以て終始せし者と云ふも過言に非ざらん 其世を去るや 志業未だ半ならず 赫々の功終に世に顯はれざりしも 其事蹟を後人に傳へ 以て永く追思の誠を展ふるは 門弟子の至情誠に止むべからざるものあり 況や師は曾て一たび他に嫁せしが 故ありて大歸したる後は節を守りて 寡居したれば其祀を奉すべき子孫あらざるに於てや 是れ某等が師の爲に一碑を谷中天王寺塋域の近傍に建立せんと欲する所以なり 但某等力微にして 功を成すに足らざるのみならず 師と親交ありし君子淑女 乃至同門の弟子にて 某等と志を同ふして 情を分つもの必ず世に多かるべきを信じ 茲に微衷を告白して 敢て多少の義捐を乞はんと欲す 伏して望むらくは大方の君子淑女賛ふて濟美の德を明にせられんことを

故松本荻江門人

有志者

一 建碑に關する一切の事務は麻布區飯倉三丁目東京天文臺官舎寺尾きく方に於て取扱ひ申候

一 捐金は左の銀行本支店中御便宜の箇所へ御送附願上候

株式會社 **東海銀行**

本店 東京日本橋區堀江町壹、壹

支店 同 京橋區尾張町壹、四

支店 同 本郷區本郷三、八

支店 同 赤坂區田町貳、十二

支店 同 本所區外手町貳番地

支店 同 芝區三田壹丁目五番地

支店 同 淺草區並木町壹番地

但し明治三十三年八月卅一日迄に御寄附を乞ふ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

明治三十二年九月十五日遞信省認可

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

明治三十二年九月十五日逓信省認可